
神鎗と恋姫達(オリエント)

一番槍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

この物語は、そんな周りの風評はいざ知らず、のらりくらりと走り回る青年の話である。

「けどボクが目指すのはこんなモノや無いで？」

時は三国、多くの雄志たちが乱舞する時代。

彼の名は「張汎」、張遼の兄にして最速を目指す者である。

t o b e c o n t i n u e d

……とまあ、少し電波発しながら悶絶してもうたわ、商人のオッサンの前で、話聞いた直後。ドン引きやったな、オッサン。

そんで気付いたんやけど、しーちゃんがいつか武将になるっちゆうことや。

けどな、何処の武将か判らんねん。

え？三国志の知識は無いのだった？

うん、それがなあ、さっきも言ったと思うけど困った事にアジア圏の歴史は日本以外あんまり無いみたいなんや、「歴史知識で先読みしてオレTUEEEEE！」ってな感じにイカンのやなコレが。歴史は日本とヨーロッパ圏辺りの知識なんや。

とまあ、妹の事が心配で情報収集は欠かさんようにしてる。何気に商人のオッサン色んなトコ行つとるんや、スゴいなオッサン。

さてさて、この世界で果たして生き残れるかどうか。ハア〜長生きしたいなあ、しーちゃんが結婚するまで。兄として見届けたいやん？シスコン？褒め言葉や……………

私には兄ちゃんが一人居る。名前は張汎、真名が銀やから「ギンにい」って呼ぶのだ。

ギンには私の自慢の兄ちゃんや、とっても頭がええし、足もすく早く。

そしてとっても優しいんや！

昔、ギンにの作っていた「がんだむ」人形を壊してしもうたことがあつたんや。

怒られると思うてビクビクしてもうたけど、ギンには笑って「しやあないなあ」って言うて私に「あいるー」つちゆう猫さん人形を作ってくれた。

今は私の大切な宝物や。

そしてギンにはいつも頭を撫でてくれる。しつこく無くてやさしい感じや。癖になつてまう

そんな大好きなギンにいやけど今日も朝起きたら隣にいない。また今日も「たんれん」に行つてるみたいや。一回ぐらいギンにいの寝顔見てみたいのになあ、今日も失敗や。

うーん、ちときつう言い過ぎたかなあ？

.....

..... ぎ、嫌われてもったああああ
.....
あああああああ.....!.....!.....!

どっどっどっどないしよ!?

そ、素数を数えるんや。素数は孤独な数字、ボクに勇気を与えてくれる! 2、4、6、8、10って2の倍数やないかー!.....い、ハッハッハッハッってちやうわあああ!.....!

..... ハア、ままならんモンやなあ。樋口クン。

どないしよ.....

第三話　　＼mother and father＼

さて、霞と仲違いしてしまった張汎こと銀。

そんな彼が傷心ながらトボトボと家へ帰ると………

「お帰りなさい　ギン君」

………　修羅が待ち受けていた。

「ギインクウン???.?。」

ゾワッ!!

そ、そうや今は母ちゃんがおったんや!!

というか母ちゃん怖い!!後ろに何かオーラが見えるで!!父ちゃんも助けて!

え?今回はお前が悪い?分かっとなるけどお!プ、プレッシャーが重
いんや!

アカン、精神擦り切れそうや……………

S i d e . 母

今ウチの前に息子の銀が座つとる。

事の発端は霞ちゃんが帰つて来た時や。扉を強く開けて帰つて来たと思つたら、台の上に置いとつた朝ご飯すぐに食べてしもつて出ていった。

何やおかしい様子やつた。父ちゃんもそう思つとつたようので私に視線を合わせた。

「どないししたんやろ？霞ちゃん。」

私がそう言つと父ちゃんは「フム」と言つて考え始めた。

それでも父ちゃんは昔は優秀な文官やつた。武だけが取り柄の私よりもすぐに判るやろ。

そしたら父ちゃんの考えがまとまつたようや。

「多分、銀が原因じゃないか？」

あ、そういうえばギン君まだ帰って来とらんなあ？でも、

「どうしてギン君や？あの二人仲良しやろ？」

「フツ、違うない。」

……………なんか私がバカにされとるみたいで腹立つなあ。

でもそうなんや。あの二人はとっても仲良しなんや、それも周りから見ても判るように。……………霞ちゃんのギン君見る目が恋する乙女に近いのはちつとばかりし気になるけど。

まあ二人はそれぐらい仲良しや。どうも喧嘩するように 見えへんけど……………

「あゝ、お前は一つ誤解しているなあ」

「へ？」

「銀と霞には精神の差があるんだ」

「精神の差？」

「そう、自分と他人の考え方、感覚、好き嫌いは全く違う。前に銀から『知識』の相談を受けただろう？その別方向だ。」

「やったらギン君の意見と霞ちゃんの意見がぶつかったってこと？」

「まあそれもあるが……………」

「何？他にあるん？」

「……………銀は大人の価値観を持ち始めているだろう？」

……………あー、そういうことか。

成る程、父ちゃんの言いたい事が解ったわ。

「解ったようだな？」

「うん、そりゃ霞ちゃんも怒るわ」

「そういうことだ」

さて？どう説教したるか？

S i d e . 張 汎

「ギン君？」

母ちゃんが急に真面目な顔になってしゃがみ込んで目を合わせてきた。

そして母ちゃんはため息一つ吐いてボクに言った。

「大人の価値観押し付けちゃあかんよ？」…………… やっぱり父ちやんと母ちゃんには敵わんなあ？もうスツカリバレとるやん。

「なんや？白状する必要無いやん？」

「アホウ（馬鹿者）」「」

ゴチンツ！！

バコンツ！！

「オウツ！！」

……い、痛いわあ……ゲンコに本の角って。

涙目で見上げたら母ちゃんがグー握りながらニッコリと笑って、父ちゃんは肩に辞書乗せながら呆れていた。

「無駄口叩く暇があったら早う行き。」

「全くもってその通りだ。」

……うん、そうやな。ちと足が痺れるけどはよ行かなんなあ。

「うん、スマンスマン。んじゃ、父ちゃん母ちゃん

しーちゃん探しに行って来るわ。」

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.....

第三話 〈mother and father〉 (後書き)

- Key Word -

・大人の価値観

子供の頃は純粹に欲求丸出しだったんですけどね、年取るといつの間にかその感覚がなくなって代わりに損得、論理的、客観的、色んな物が混ざったものが出来てしまいます。年は取りたくないですねえ。

昔の自分の写真見たりして思い出すのも中々楽しいものです。

第四話 ｛my little sisters｝

Side・霞（張遼）

ギンにいに「大嫌い」って言ってしもうたあと、私は朝ご飯を食べ
てすぐに家を出た。

行くところはさっきの森の反対側、大きな川が流れてるところや。

そこでは魚を捕ったり、服の洗濯ろかやつとる。

着いてから私は川の畔に座り込んだ。

「……………はぁ、どないしょ」

もちろんさっきの言葉は本当やない。ギンにいの事は大好きや。

けどハッキリと「ダメ」って言われたときに、ぶじゅつができない
と言うより別の気持ちができえた。

ギンにいが私のことを拒んだということ。

ギンにいがいじわるで言ったことじゃないのは分かるんや。でもあの時言われた瞬間に頭の中が真っ白になってしもった。

ギンにいが私から離れていくような気がして。

心の中が悲しくなってきた、もうグチャグチャになってきて。

私は「大嫌い」って言ってしもった。

どうやって謝ろうっ、そう思うってこの川で考えることにしたんや。

でも本当にどないしよ？あんなこと言うてしもうたあとやから顔も合わせづらい。

かといつて「ごめんね」って言うのも違うと思う。もっと相手のことを考える必要があるんや！

でも、いまのギンにい私のことどう思うとるんやろ？

あんなこと言うてしもうた手前やし、……………ま、まさか私のことちよつと嫌いになつてもうた！？

ア、アカン。謝る自信がなくなつてきた……………

私はギンにいのことは大好きや。将来はギンに以外との「けつこん」は考えられへん。(情操教育不足)

だつて、ほかの男の子達は女の子よりも弱いんやもん。この前も隣村のミネちゃんが幼なじみの贅瀨君のおもちや取っただけでビービー泣いてしもうたつて言うつた。

まあさりげなく取ってしまうミネちゃんもどうかと思うけどな？男の子なんだからすぐ泣くななんてどうかと思つたで。

それに比べてウチのギンにいはかっこええ！泣いたところも見たこ

とないし、泣くどころかカツコイイ笑い方するんや！ごう、「フッ
って！」

それにギンには村の子供達の人気者や。みんなからは「汎はんにい」
って呼ばれとる。

「ギンにい」って呼べるのは私だけや。フフン 私が特別ってこと
やな

あ、この前ギンに向かいに住んでる鍛冶屋の娘の乱ちゃんに鉄の
耳飾り貰うとったな。乱ちゃん顔真っ赤つかやったわ。あれはちと
マズいなあ……………

ハッ！？そういえばギンにいこの前貰い物のお礼に「真名でええや
る」って言うとったわ！！わ、私の特権があ！！

……………ん？貰い物？

！！そうや！贈り物や仲直りのしるしに贈り物を渡せばええんや！
いや〜なんで今まで気付かんのやったる？

でも贈り物なあ、ギンにいどんなのがすきなんやろ？

おもちゃは欲しそうな感じやない、むしろ作る方や。ギンに手先
器用やからなあ。この前「どらえもん」っていうタヌキの人形作っ
とったな。ギンには猫言うとったけど、アレはタヌキや。

飾り物はもう乱ちゃんに先手を打たれてしもった。同い年とは思え
んぐらいエエ出来やった、くやしけど。

食べ物、はムリや。ギンにいの好き嫌いがわからへん。

.....私、とか？

イヤイヤ！、い、嫌やないけどこういうのは「じゅんじょ」「って
もんあるってとなりのお姉さんは言っとった！うん、これはまだや
な。

うん、中々思いつかんなあ。そこらに何かないやろか？

……アレ？川の向こうの花、ええなあ。色も派手や無つて綺麗な白や。

うん、アレにしよう。

ギシッ

花はいっぱい採れたからええけどこの橋うるさいなあ、私が生まれる前に作ったんやっけ？

ミシッ

そういえば、ギンにいと乱ちゃん新しい橋のこと話しとったな？」「あーち」ってやつ、ギンに「これは、アーチだ……」「ってなんか真面目に語っとったけど。何やったんやろ？」

ギギギギギ……………

ギンに「謝ったら許してくれるかなあ？いや、しっかりとごめんなさい言っんや！そんで

バキイツ！！！！

あれ？なんで私落っこちとるん？

ああ、橋が壊れてもつたんや。そんで私は今落ちとるんや。

なんかおそく感じるなあ。

ギンにいに大嫌い言うてしもつた罰なんやろか。

ああ、ギンにいに謝りたかったなあ……

「ギン………」

「……」

「だいじょぶか？しーちゃん」……………へ？

Side・張汎

さあ、しーちゃん探そうと思たんやけど……………

「どーこ行ったんやろ？」

そう、当てが無いんや。まあこんな事初めてやしなあ。

ファーストアラートやな、うん。

ボクが家の前でそう呼ぶと金髪ショートカットの女の子が出て来た。

「どうしたの？汎お兄ちゃん」

この子の名前は高順、ボクの幼なじみや。鍛治が得意で五歳なのにこの前ボクにシルバーアクセ作ってくれたんや。この世界の女の子はすごいなあ。

ってそうやなくて

「しーちゃんが出て行ってしもうたんや、何か知らへん？」

しーちゃんと同じ年で一番仲良いのはこの子や。何か知ったらエエけど……………

「うーん、きょうは鍛冶場にいたからよくわかんない」

「そっか……………」

「でもしーちゃんはんがえごことをするときには川に行ってるよ？」

フム、川か。これは良いこと聞いたなあ。

「ありがとなあ、順ちゃん」

とりあえずお礼に撫でとこ。

「えへへへ、お兄ちゃんとしーちゃんのためだもん！おやすいよ
うだよ！」

ウン、ええ子や。

…ほな行こか。ケガしとらんかったらエエけど………

川へ行く途中思い出したけど、川の橋の状態がアブなかったなあ。

は？

橋が壊れて、しーちゃんが落ち

「っ！！！！霞アアア！！！！」

ガッ！！！！

S i d e · o t h e r

橋が壊れ霞が川へ落ち始めた瞬間、銀は駆け出した。

距離にして200メートル、普通ではもう手遅れである。しかし

張汎は走る、走り続ける。彼は求めた、生き残るために

彼は求めた、守るために

彼は求めた、ひたすら求めた。純粹に、貪欲に。

速さを。

一蹴にしておよそ20メートル。彼は一瞬で進んだ。

（遅い！）

そして刹那の時間で次の足を踏み込む。

（遅い！遅い！！）

そしてまた一瞬で進む。

（遅い！遅い！！遅い！！！！）

踏み込む、進む、踏み込む、進む、踏み込む、進む

(まだや！こんなモンやない！！まだ行ける！もっともっともっと
もっともっともっともっともっと
！！！！)

「速さを！！！」

この一瞬、一時、刹那。

彼の世界が変わった。

森羅万象、すべての速度が遅くなる。

そんな世界を何の束縛も無く。

彼は駆け抜ける。

地を蹴り、水を蹴り。

ただ真つ直ぐと。

愛する者へと必死に手を伸ばし。

そしてその手は……

.....届いた。

S i d e . 張 汎

.....間に合った、危なかったなあ。

しーちゃんは腕の中で目え閉じとる。.....まだ落ちとると思っ
てるん？

「だいじょぶか？しーちゃん」

「.....え？」

しーちゃんはポカンとした顔で目を開けた。
かわええなあ。

さ、家に帰ろっ？しーちゃん、

うんっ！

今日は大変な一日やったなあ。

しーちゃんなんて泣き疲れて背中では眠つとるわ。

……………しーちゃんもだんだん大きくなるなあ。

ボクは守る。この背中の重みを、家族を、大切な人を。

絶対に。

t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d.....
.....
.....

第五話 ｛God speed love｝

Side・張汎

目が覚めたら布団の中やった。

「見慣れた天井や」

んなアホなこと言っとらんてサッサと起きよつと思っただけ………

………ミジッ………

結果としては成功や。ボクがおはじきを上に投げた瞬間あの感覚で集中、そして見事おはじきは落ちてこんかった。片手で一発で回収出来たわ。

そのかわり右腕が少し痛かった。七歳児の体にはちときついなあ。

今度の鍛練の課題としては体の頑丈さやな。

そのあとしーちゃんと母ちゃんが一緒に来てボクに号泣しながら抱き着いてきて内蔵が更に痛んだり、二人が父ちゃんに正座で説教受けたりと色々あった。

そんで数日間の寝たきり生活が続いたんや。

まあ色んな人が見舞いに来てくれたわ。

順ちゃんが見舞いに来てくれた時に、松葉杖のようなものを作ってきてくれた。

感極まって真名交換して順ちゃん改め乱ちゃんと呼ぶことになった。

しーちゃんは不満げやったけどどうしたんやる？

川の橋は他の村と提携して新しく作るらしい。ボクのトラス構造の案が採用されたみたいや。

そんな感じで毎日退屈せんかったわ。ありがとう、皆。

「ギン君！武術するでー！」

「……………はい？」

しーちゃん転落事件から一ヶ月後。母ちゃんが突然そんなことを口走った。

まあ今までは足が速いだけの文官向きの子と思うとって、しーちゃんだけに教えようと思うとったらしい。まあボクは見た感じ体が細かいからなあ。

母ちゃんは昔は武官だったらしくてそれなりに強かったそうや。けど、文官だった父ちゃんに口説き落とされてこの村で暮らすことになったということや。

母ちゃん曰く「初めて手を使わせられずに負けた」って。父ちゃん何者や？

そこで訓練初日。ボクと母ちゃんは家の裏手の庭におった。以外と
広いいんやけど、使ったことはなかったわ。

母ちゃんは、

「ここを訓練場とするー!!」

と叫んだ。

……………なんか水曜日に放送されとる旅番組のディレクターみたい
なセリフやな。

つと、こついつのは出だしが肝心やな。ちゃんと返事しよか、えー
つとこついつ訓練の返事は……………

「Sir! Yes, sir!」

「……………は？」

「って!!! 違う! ここ中国やったわ!!! しかも母ちゃん女やし! サーヤない、マアヤ!!!」

「ギ、ギン君? 今の言葉はなんや？」

「あ、ああ。ボクの知識の中の西洋、つまりここからずっと西にある国の言葉でな? 『わかりました! 上官殿!!!』 って意味やねん」

「へえ、西にも色んな民族があるって事か？」

「そう、東の海の果てと西の果てって繋がってるんやで?」

「へ？」

「まあ詳しく言うとビッグバン、つまり……………」

「うんっ! 武術しよ! それは父ちゃんの専門や」……………逃げたな、難しかったやろか?

「私は一応剣も出来るけど、どちらかと言つと槍が得意や、ギン君はどっちがええ?」

ふむ、やったら……………

「槍でええよ、ボクに合いそうな気がするわ。」

「よっしゃ！！了解や。でもまずは体作りからやで？ひよろひよろやと剣も持てんからな？」

「わかったわ」

そこで母ちゃん指導の調練が始まった。一ヶ月ぐらいで基本的な槍の使い方、体の動かし方は覚えたわ。

ポンポンと覚えていったから母ちゃんの指導に熱が入っていったわ。

ついにはホンマもんの槍を持って来よったわ。気合い入りすぎやろ

……………

「あの感覚」はあんまり使わんようにした。体の負荷が大きいんや。空気抵抗も凄いし。何か一時でもええから体頑丈にする方法があらへんかなあ？

模擬戦では足りん力を速さで補うて少しは打ち合える。母ちゃんは
ますます熱入れてきて本気をちらほら出してくる。痛いんやで？刃
あ漬してあるけど。

夜は父ちゃんと論議するようになった。

父ちゃんは孫子とかの学問や国の政治。ボクはギリシヤの幾何学や
ローマ戦争、ペルシヤ戦争等の戦術。お互いに講義し合った。

しーちゃんはボクが某スパルタ軍三百名の兵士の物語を童話風にア
レンジしたのを目をキラキラさせて聞いた。

母ちゃんはどっちの話にも着いていけなくて、ぐっすりと眠った。
た。男子高校生やんか………

S i d e ・ 父

最近息子の銀とよく討論するようになった。

喧嘩的な意味ではなく、学問的な意味でだ。

こういうのはもっと遅くにするようになって思ったが。これも銀の「知識」がそれを早めたのだろう。

普通に考えたら銀の「知識」は異常だ。赤子は何も知らずに生まれて来るはずだからだ。予め入っていたなど聞いたことがない。

それにその「知識」の内容も危険だ。子供のお伽話と違っていたが銀が地図を書き出した時には冷や汗が出た。宮中の地図よりも正確だったからだ。他にも幾何学といった理に適う算術や、「ぎりしゃ」と言った西の更に西にある異民族の軍師達の戦術等を聞いた。

ハッキリ言って銀の「知識」の文化水準はかなり高い。

故に危険だ。使いようによってはかなり良い方向に進むかも知れない、だが失敗した場合の損害が酷い。

どんな美酒でも一気に大量に飲めば毒になりうるのだ。銀曰く「急性あるこーる中毒」だったか？

銀もそのことを弁えているようなので、大丈夫だろう。

……どうも文官だった時の気質が抜けない。もともと宮中での不穏な空気を読みとって、武官だった美^み亞^あを必死に口説き落としてこまで逃げて来たんだが。

銀はいずれ起こるでかい動きに巻き込まれる可能性が高いだろう。

銀だけではない、霞もだ。あの子は確実に美^み亞^あの娘だ。見た目も性格もそっくり過ぎる。いつか武に目覚めて武官として仕官するし、銀の話を少しだけ理解している辺り美^み亞^あよりも頭が良い。

そういえば銀は容姿だけでなく能力も俺寄りだと思ったが、実はどっちも十分に引き継いでいるようだ。

霞が橋から落ちる前に走って助けたと聞いた時は思わず頭を抱えそうになった。

口ではよく言うがそう簡単に出来るものではない。

手元の林檎を上には振り投げてみる。ある程度上上がったらストーンと手に落ちた。そう、物は落ちたら加速するのだ。

これが橋の上の霞だったらどうだろう？

あの橋は割と低かった。霞が川に着水するのは一瞬だ。

その一瞬で銀は追い付いて霞を助けた。この時点でおかしい。今まで見た武官にもそんな速さのやつは居なかった。

流石になんの冗談だと思ったが霞をつれて帰ってきた時の吐血、そして両足の状態から笑って流す事が出来なかった。

逃げ足を鍛えていたとは聞いたが、もう逃げ足の域を超えているぞ

.....

まさに神業の領域、神の速さ。

………神速、か。

フフ、言い得て妙だな。霞を助けるために手にした速さ、神速の想いか。

「知識」のことならまだしも銀には色々驚かされる。

美亞に銀の武術の指導をさせておくように言っておいて正解だった。現に今槍さばきが良くなってきている。………竹槍じゃあ頼り無いからなあ？

銀はそこらの武将では収まらんだろう。

確実に、この大陸に名を轟かせる存在になる。

もちろん霞もそれに近い存在だ。

全く、俺は孫の顔がただ見ただけだったのに………どうして

こつも英雄の才能を持つ奴らが生まれるんだ？

だがそれでも、銀と霞は俺と美亞の紛れも無い子供達だ。

自ら進み出すその時まで、俺は支え続けよう。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.....

第五話 ｛ God speed love ｝ (後書き)

- Key Word -

・某スパルタ軍三百名の兵士達

｛映画「300 (スリーハンドレット)」。スパルタの精鋭三百名が何万ものペルシャ軍にケンカを売る話。R指定入ってるけど必見の価値あり。

・父ちゃんの林檎

｛ニュートンの万有引力。ニュートンは木から林檎が落ちるところから発見したが。似たような理論を霞転落事件より父ちゃんが作り上げた。周りの皆はあまり重要に受け止めなかったが銀はかなり驚いていた。

・ここを調練場とする!!!

｛旅番組「水曜日どうでしょう」の名言の内の一つ。ED曲がかなり良い。

第六話 ～ Joker ～ (前書き)

初めてのバトル描写です。

第六話 〈Joker〉

S i d e ・ 張 汎

母ちゃんと訓練を始めて早一年。槍の扱いも人並み以上になってきたと思うなあ。

今ボクは一人で槍を振るっている。一昨日からしーちゃんも槍の訓練をすることになったんや。ちよつと向こうで母ちゃんとやっとなるんやけど……………

90

「槍つてのは突く、薙ぎ払う。他に何かある？ 霞ちゃん」

「はい母ちゃん！ 柄の長さを使って相手を傷つけることもなく戦うことができますー！！」

「そつやー！ それだけ槍には無限の可能性があるんやー！ 槍は浪漫やー！！！！」

「す、すごいで母ちゃん!! 槍すごい!!」 「霞ちゃん、私は槍が好きや。槍の手数で相手を惑わすのが好きや。集団で皆と一気に槍を突き出すのが好きや。槍を複数持つて相手に投げるのも良え。槍を突く時に出る風切り音なんて素晴らしい。剣使いの相手に優位になるのなんてゾクゾクしてまう。霞ちゃん、私は槍が大好きや。霞ちゃんは何を望むんや?」

「槍! 槍! 槍! 槍!」

「よろしい、ならば槍や。」

………うん、突っ込んだらアカン。気にしたら負けや。無心になって動こう。それがええ。

さて、向こうは放つといてこっちはやることやっところか。

集中する。……自分の周り、風、揺れる
木、母ちゃん達、総てがだんだん遅くなっていく。……
……その中で自分は独り、束縛されない。……
……森羅万象ありとあらゆるものがほぼ停止し
ボクは槍を突く。

「射殺せ」

ヒュッ!

……うん、去年よりはマトモになったなあ。この「感覚」での突き。

けどまだまだやな。体が少しジンジンするわ。連続では使えんな。

それにしてもどないしょ？もうこれ以上変えようが無いんやけど……

体の筋肉はもう慣れた。慣れるようにじっくりとやっとなしな。

構え方も問題無い。今使うとるのが一番負担が無い。動かし方も同じくや。

けど、空気抵抗や。必ずかかってしまう。こればかりはホンマに無理や。やっぱり受けてまう。

何か受け流すようなモノを付けなるとなあ……………

「ん？銀、どうした？」

「あ、父ちゃん。耕すの終わったん？」

「まあな。美亞は何して……………」

「霞！その調子や！槍と心を一つにするんや！！」

「うおおおお！人槍じんそう一体！！！！」

「うちたちに！！！！！！」

「突 け ぬ も の 無 し ！！！！」

「……………あゝそういうば霞もするようになったんだな。」

「父ちゃん、母ちゃん働いてた時もあんなんやったん？」

「ああ、部隊の連中と一緒にな。付いたあだ名が『槍女』だったな……………」

……………槍女、なんや妖怪みたいなあだ名やな。

「そうか、美亞は霞の相手か。よし銀、今日は俺が相手しよう」

「……………うん？父ちゃん文官やなかったっけ？」

「文官が皆戦えない事は無いだろ？先に畑前まで行っとけ、ちよつと準備して来る。」

そして畑前、ボクは父ちゃんを待った。

……ホンマ父ちゃん何者や……やたら鋭かったり、ニユ
ートンの万有引力に似た論理考えたり、畑耕したり……。
それで戦えるやて？それで元文官とかやないやろ……

「おう、待たせたな」

あ、来た来た。つて？

「父ちゃん？その武器何？」

「ん？ああ、鎖の先に分銅の代わりに短剣を付けたやつだ。少し距離のある相手にやりやすい。」

ふうん、なかなか面白い武器やなあ？

「じゃあ、この硬貨が地面に落ちたら開始だ。いいか？」

「うん、ええで。」

プーーーーン

「それでほ、」

「尋常じゃ、」

チャリンッ

「「勝負ー!!」」

Side・other

「いくぞ」

始まった瞬間、まず最初に動いたのは父だった。

前方に飛び込みながら両手の鎖を振るう。

ジャラララララララララ！

鎖の先の短剣は正確に張汎を狙う。

彼は当たる寸前に余裕を持って避けた。

（ちと速いなあ、でもまだ大丈夫や）

ヒュッ！

そして避けた直後に槍を突く。予備動作を感じさせない突きである。

だが父は体を直角に傾けながら突きを避け後ろへ下がった。

（八歳の突きじゃないぞこれ……………）

そうしてゲンナリする父。だがすぐに思考を切り換えた。

（少し本気出すか）

そう思った瞬間、張汎は前に飛び出して槍を突き出していた。

「シッ！」

落ち着いた様子で父は腕を振る。

ジャララララ！

張汎は突きながら体を反らしたが。

「うっ！？」

短剣が急に方向を変えて張汎に襲い掛かった！

急いで短剣を防ぐ張汎。だが大きな隙が出来た。

「もう一本あるぞ」

後からも方向を変えた短剣が飛んで来た。張汎は辛うじて避けバツクステップをとった。

(なんや今の？生き物みたいに飛んできよった)

張汎はより一層気合いを込め、父へ挑んだ。

それから一時間後、張汎はボロボロになっていた。体のあちこちに切り傷ができている。

片方の父は服に多少の裂け目が出来ていたがほぼ無傷だった。

だが張汎に進展がなかったわけでは無い彼もだんだんと不意打ちに反応出来るようになってきたのだ。

「なあ、銀。」

お互いに睨み合う中、父が口を開いた。

「なんや？父ちゃん。」

「お前のおっき、見せてみる。」

「……………」

「俺もおっきを見せてやる。だから、ここで決着を着けよう。」

「……………解ったわ。」

お互いに静寂が訪れた。

張汎は腰を低く落とし、構える。

父は両肩をストンと降ろし、張汎を見据えた。

お互いの緊張が極限に達した瞬間

「ハアアツツ!!!」

父が全身を振るい短剣を放った。

ジャラララララララララ！！
ジャラララララララララ！！

何度も方向を転換し、張汎へと迫る短剣。

その速度はもはや音速の域。

鎖も着いているその様はさながら二匹の蛇のようだった。

しかし、

この時既に、

張汎の世界は出来上がっていた。

「射殺せ」

その言葉は自分の突きへの撃鉄。

張汎の咳きが父に聞こえた瞬間

ズドンッ！！

父は吹き飛んだ。

Side・張汎

……………ヤバイ、やっってもうた。

いや、思いつ切りやってみただけ。父ちゃん吹っ飛んでもうたわ。

……………し、死んどらへんよね？刃、潰してあるしなあ？

「と、父ちゃん？」

………マズイ、返事無い。どうしよ？「っ」「っ」殺してもう
たかも知れん！？

「ふむ、中々効いた。」

「………へ？」あれ？父ちゃん生きとったけど………

「な、何で無傷なん？」

「ん？ああ、お前はまだ知らなかったな？」

父ちゃんは口を歪ませながら手から黒いモヤモヤの球をポンと出した。

「『気』だ。」

……………気って何？

その後父ちゃんから「気」について色々聞いた。

どうも一部の武術家が使えるものらしい。

「気」は固めたり、飛ばしたりと色々な応用が利くそうや。何処の龍球こやねん。

つくづく非常識な世界と想つとつたらまさかこんなモンがあるなんてなあ……………もう何も驚かへん。一種の悟り開きそつや。オナカスイタナア。

もう辺りは真つ暗になつてて。家に帰つたらはボクと父ちゃんの分のご飯が台の上に置いてあつた。

奥を見ると母ちゃんとしーちゃんが一緒に寝てた。格好から飯食つた後も待つとつたみたいや。

父ちゃんと苦笑いしながら二人を布団へ運んだ。

ご飯は冷めとつたけど美味しかったわ。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.....

第六話 〈Joker〉（後書き）

- Key Word -

・霞、私は

〈漫画「HELLSING」より。少佐の演説シーンはほとんどチート。登場人物

・突けぬものなし

〈スーパーロボット大戦より。ダイゼンガー。作者は機体の中では一番好き。

・龍球Z

〈ドラゴンボール。七つを集めたら願いが叶うというドラゴンボールを巡るバトル漫画。ゲーム含めOP曲のほとんどが名曲。

第七話 ｛there is it・there isn't it｝(前書)

オリ設定全開です父ちゃんの解釈ということでご勘弁を。

第七話 } there is it . there isn't it }

Side・張汎

父ちゃんとの模擬戦の後。ボクは次の日に気の訓練を行うことになった。

気に関して色々考える事があつたから頼んだんや。

そして朝、ボクと父ちゃんは昨日と同じ畑の前にいた。

地面に昨日の模擬戦の跡がちらほら残つとる。

とても子供と大人が戦つた名残とは思えんわ……………

「さて、銀。昨日俺が話した事は覚えてるか？」

「うん、気はありとあらゆる場所に存在するんやろ？」

これは昨日飯食つとる間に教えてもらったな。

「その通り、気はどこにでもある。草、水、空気、虫、畜生、そして」

父ちゃんは親指で自分を指差した。

「人間だ。」

「でも父ちゃん、ボク気なんて見たことも無いし感じた事もあらへんで？」

ボクは生まれてから早八年、そうゆうモン見たことも無いし感じたこともなかった。

勿論ボクの「知識」にも無い。科学で「非常識」と言われてもなんら変や無い。まあボク自身すでに非常識な存在になっているんやけど……………

あるとしたら某鳥山先生の漫画ぐらいや。

……………もしかして友達を爆発された悲しみで使えるようになるんか？ 賛瀨君花火で爆発させよか？

「あー…言っとくが感情云々で使える事はあまり無いぞ？ そんなにだっいたら使えるやつはわんさか出てくる。」

あら残念。

「なら父ちゃん、どないして使うん？」

「経験と想像だ。」

「経験と想像？」

イメージってことか？

「気関係の事は文献や巻物、武術指南にはほとんど記されていない。秘伝って事で知られているが………習得して解ったんだが、これは抽象的なやつだ。俺も一発ぶち込まれなきゃ習得出来なかった。」

「ぶち込まれたって」

父ちゃん一体何があったんや………

「ちなみに女性は扱いに長けている事が多い。まあ女性は美亞とかは勿論、強いのが沢山いるからな。これは反射的に体内に巡らせる事が出来るようだからだ。」

なるほどなあ。だから女性の武將が多いんや。

「だがこれが男に出来ないと言ったら違う。多少なり意識すれば使える。」

「女性は先天的、男性は後天的ってことか？」

「その通り。んじゃ、やってみるか。」

父ちゃんの手の手平から黒い球が出てきた。

「これは気を変化させずにそのまま出したやつだ。触れてみる。」

なんか黒くて恐ろしいんやけど……まあ一気に触ろ。

あー、成る程。

父ちゃんの言ったことが分かった気がするわ。

「これは説明の仕様が無いなあ。」

「なんだ？もう判ったのか？」「うん、まあ漠然と。なんか気づいて感じや。」

「まあ、その通りなんだが………いくら何でも早過ぎだろ。」

なんか父ちゃんがボソボソ言うところけど「気」について少し理解した気がする。

これは物質、エネルギー、熱、ボクの知識にあるようなモノや無い。

これは「気」と言う事や。

他の何物でも無い純粹なモノ。この世界には「気」というボクの知

識の世界にはない新しいカテゴリーが有るんや。しかもそこら中に父ちゃん曰く、女性が強いのは「子供を産む」という行為に新しい生命に与える為の気が沢山あると言っことや。それもぎょうさん。

「女性が強いワケや……」

「まあそれに気付かない男も大概だけだな。気を知った奴らは性別に関係なく強くなる。」

「男は少ないのに?」

「気は『そこに有って』、『そこに無い』んだよ。興味が無ければ、そこには存在しない。女は子供を産めるが男は子供を産めない。別に有っても無くても生きて行けるからな?」

……………女尊男卑の世界と思っつたけど、この世界はある意味「女性は強い」と言うことを表しとるだけかも知れんなあ?

「さて、気の場合は覚えたな？次は自分で出してみる。」

「いやそんな急に、どうやるん？」

「自分で考えろ、お前の気だお前で扱え。」

自分の「気」か……………まあボクも持つとるんやるなあ。

だったらその気を丸くポーンってな感じで

うん、ダメやなあ。

「まあ、そんな簡単に出ないだろ。俺が畑耕すのが終わるまでやっ
とけ。」

「……………うん。」

出る！ボクの気い出る！！出るおおおお！！！！！！

我に内包されし気よ、我が右手に力を！！ってこれは痛いわ……………

たのし〜気〜い〜がぽぽぽん

.....アカン、全く出えへん。

これは中々ムズいなあ。今までの槍の訓練とは大違いや。

心技体の心といったところやな。

って父ちゃんももう半分耕してもうたわ、早過ぎやろ。畑かなり広いで？三十分でそこまで.....

うん、父ちゃんさっき何て言ったっけ？

『気は』そこに有って『』そこに無い』んだよ』

.....あ。

なんや、簡単な事やった。

気はこの手の平の上にあるんや。

ボウ

ほらな？

「出来たみたいだな」

父ちゃんはまだ畑耕しとる

「お、出来たわ。」

「そこに気は『有った』だろ」

「有ったな」

あ、耕すの終わった。エライ早いなあ。

「終了………つと、あ、終わった終わった。と、銀。それがお前の気だ。」

ボクの手の平の上には薄黄色いポワポワした球が浮いとる。

ってアレ？

「何で父ちゃんの氣い黒いん？」

「ん？ああ、ただの応用だ。黒い気が有るって感じだな。」
へえ、そんな応用があるんや。でも……………

「……………何で黒？」

「夜は見えにくいだろ？」

「父ちゃん文官やったのに見えにくくする必要あったん？」

「……………ただの洒落だよ。」

……………まあ、これ以上突っ込むのは止しとこ。

「じゃあ今日はここまでだな。初めて気を使ったから体がダルいだろ？」

「うん、そやな。」

ちよっと体の力が抜けた気分や。

「明日からは出した気の運用法だ。……………これからがキツイぞ？」

「……………堪忍してや。」

「言っとくがお前のとっておきに応用が利くのはまだまだ先だ。ハハツ、精進するんだな。」

アララ、バレとつたみたいや。

やっぱり父ちゃんには敵わんなあ。

「さ、家に帰るぞ。まだ昼だ、大根の漬け物作り手伝え。今日は良

いのが採れた。」

………色々な意味で。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.
.
.

第七話 ｛there is it・there isn't it｝(後書)

- Key Word -

・賛瀨君爆発

｝ドラゴンボールより。フリーザ編にてクリリンが爆死したことに
よって悟空のパワーアップのきっかけとなった。

・ぼぼぼん

｝公共広告機構のCM。地震の影響でスポンサーがCMの放送を自
重したため一時期流れ続けた。さくしゃ は あいさつ の まほ
うを となえた ！。

第八話 ｛ b i r t h o f t h e G o d l a n c e ｝ (前書き)

ブリーチの鬼道紛いのものが出ます。ご注意ください。

あと修業編はこれで終りです。次回からは日常編です。

第八話 ｛ birth of the God Lance ｝

Side · 張汎

ボクが父ちゃんと気の訓練を始めて三年経った。

まあ色々あったわ。

一年目は固定化の訓練やった。

気は元々曖昧なモノやから集中が切れるとすぐに消えてしまう。

やから最初は戦いに集中しようとしたらすぐに消えてもった。

半年ぐらいに反射的に気が出るようになった時は安心したわ。

それから気体を体には巡らせたり。放つたりしながら戦うことが出来るようになった。

二年目は気の変換訓練やった。

これが変換のバリエーションが多くて中々面白かったんや。

最初は熱や冷気だったんやけど。

次に成長、腐食、脱気といった概念に変換することが出来た。

固体化は色んな形を作る事が可能やった。体の表面に膜みたいに張って戦う人が多いそうや。

父ちゃんがやって見せてくれたけど黒い大蛇みたいなのが出てきた。

しかも勝手に動いとった。

父ちゃん曰く、頭の中で設計図を作ってそれを気を使って投影したらしい。

勝手に動くのは蛇の行動原理、習性とかを設計図の中に組み込んでいるということや。だからただの文官やないやろ、父ちゃん。

すぐに蛇は霧散してもうたけど、気の使い方次第で残す事が出来るそうや。

とりあえず結晶の盾っぽいを作ったり一時的な槍を生産したりして戦ったりした。

でも変換するのにエライ体力使ってもうて最初はすぐに息が上がったわ。

走っとったお陰で少しは持ったんやけど。特に槍を生産した時にガクツと来た。

父ちゃんは「九歳児がここまで出来るのは異常だ」と言っとったけど。父ちゃんも文官としては異常や。

三年目はかなり特殊やった。

「気」の操作法とボクの「知識」を掛け合わせた技術の開発や。

これはかなり危険やったけどボクと父ちゃんの好奇心でガンガン進んで行ったわ。

まあその分一緒に痛い目に遭ったけど。

ひどい時なんて重力を操作して空を飛ばうとしたけど一緒に地面に減り込んでしもた。いや〜死ぬかと思った。

まあ爆発したり氷漬けになったり、あと自然の雷誘発したりとか色々あったんやけど確かな手応えはあったな。ウン。あったんや……

爆発で畑の半分吹っ飛んでしもて母ちゃんとしーちゃんの怒りようは怖かったわ。

しーちゃんはギン兄だけずるいとかなんか別の事言つとったけど何だったんやろ？

そういえばしーちゃんの槍さばきも中々良くなってきた。

見る度にだんだん鋭くなって来とる。

お兄ちゃんとしては嬉しい限りや。

向かいの乱ちゃんの鍛冶スキルもメキメキと上がって来とる。

ボクがしょっちゅう西洋剣とか突撃槍とかの課題を出してみとったんやけど……………今は西洋甲冑とか作れるようになった。

商人のオツチャン繋がりでガンガン作ってたけど。お金の貯蓄がエライ事になっとった。

八歳の村娘が持つ金やないて……………

まあそんな感じで皆成長していった。

それで今、ボクは父ちゃんと村の外れの荒地におる。

畑前は母ちゃんから禁止令が出たんや。まあ当たり前やな。

しーちゃんも行きたいと言ったけど今日やるのはかなり危険やから母ちゃんと槍の訓練に行かせた。

今回は怒られずに「いつか絶対見せてや！」と言って母ちゃんのとこへ行った。内心また嫌い言われると思うてドキドキしってたわ……

さて、今日やるのは他でも無い。三年目の研究の成果や。

父ちゃんは少し離れて竹筒と筆持って待機しとる。

………文官のハズヤから似合うと思たんやけどイマイチ似合わへんな。服はいつも通り質素やし。

「あー銀、今日は三十番台の遠距離。そして九十番の範囲測定をする。準備は良いか？」

「ええで。」

「まあ今日は畑も無い。遠慮無くぶっ放せ。」

「了解や」

……さて、集中しよか。

ボクと父ちゃんで考えた気の運用法は構成するシステムによって番号が異なる。

一番から九番までは基本的な気の利用や。

やけど十番からは段々と違ってくる。

この一年であまりにも多く父ちゃんと考え過ぎた王ンやからその気
の利用法を何十番でカテゴリー分けしたんや。

例えば今からする三十番台のは

「火砲」

ゴウッ！！

とまあこのように五つの属性、五行に基づいた攻撃や。

五行つちゅうんは思想の一つで万物を成り立たせる五つの元素と言
われとる。

火の玉を放つ「火砲」

水の玉を放つ「水砲」

石を弾き飛ばす「土砲」

木を急速に生やす「木砲」

そして一時的な金属を飛ばす「金砲」や。

………うん、言いたい事はわかる。ボクもビックリしたんや。

試しに気に「変換」の概念を与えて金属を作ろうとして出来てしまった。

ボクも父ちゃんも一時思考停止してポカーンとしとったわ。

水兵リーベがこんなところで役立つとは思わなかった。

何処の最年少国家錬金術師や。しかも手合わせ無しで。

そんなこんなでこの方法は一応五行の「金」に当て嵌めたワケや。

「フム、ギン規格で全て約二十メートルぐらいか。」

「放った時にボクの意識から離れるからやるなあ。」

「まあ気弾も似たようなもんだ。次、九十番台行けるか?」

「かまへんで、一発だけ?」

「好きなやつ一発だけで良い。あんなのバカス力使ったら村が消える。」

さて、次は九十番台や。九十番台はそれぞれの番台の総集結みたいなものや。

今回は九十三番にしようか?

さて、こればかりは気合い入れな。

「……………木は火を生み」

言葉を紡ぐ。

「火は土を生み」

それはこの世の理。

「土は金を生み」

それはこの世の理。

「金は水を生み」

その輪廻の輪を。

「水は木を生む」

解き放つ。

「……………五行砲」

キンッ

ゴオオオオオオオオオオッ！！！！！！

目の前の地面が大きく剝れてしまった。

「五行砲」は自分の周りに五つの元素の点を置くことから始まる。

その点がボクを中心に気のエネルギーをサイクルさせる。

そのサイクルが周りの気も取り込み始める。

サイクルしていく内に貯まった莫大な気のエネルギーを手の平に移動させる。

そしてそれを放つって寸法や。

このように九十番台はかなり破壊力が高過ぎるのが多い。

それに時間も要る。イメージをはっきりさせるために口に出して言う必要があるんや。

「あゝ、ほとんど消し飛んだな……………村から離れといて正解だったか。」

「九十番台使う機会なんて無いに等しいと思うで？九十七番はあると思うけど……………」

「賊なんざ何時でも増え続ける。持つてる事に越した事は無い。」

「確かに」

「さ、竹簡もまとめたし帰るぞ。」

.....

「.....」

「.....どうした？」

「父ちゃん、まだや。」

まだこれで終りや無い。

「.....完成したのか？」

「……………うん。」

「……………見せてみる。」

S i d e ・ o t h e r

二人は向き合っていた。

父はただ真っ直ぐと見据える。

息子の成果を見届けるために。

張汎は思い返していた。今までのの事を。

恐怖した。自分の知識に。

恐怖した。今までと全く違う世界に。

恐怖した。妹が落ちる瞬間を。

故に彼は望んだ。

速さを。

絶対的な速さを

己を、両親を、妹を、友を、彼の大切なものを全てを守るために。

遅ければ何も救えない。

遅かったでは意味が無い。

だからこそその速さ。それを彼は望んだ。

それは一つの完成型。

齡十歳にして彼はそれを完成させた。

これもまた彼が望んだ速さなのか………

全身をを青い気が漂い始める。

彼の気持ちに応えるかのよつに。

彼の世界が構成される。

何人たりとも彼を束縛出来ない、彼だけの世界。

森羅万象総てが静止した瞬間。

彼は小さく笑った

「射殺せ」

父が気付いた時には。

彼は笑顔で父の胸三寸に槍を突き立てていた。

父は心の中で苦笑せざるを得なかった。

Side・張汎

「ここまでとは……………逃げ足鍛えてるんじゃない無かったのか？」

父ちゃんが呆れ顔で聞いてくる。

前まではそうやったけどなあ……………

「逃げるついでにちょっと人守ったり救ったりしようと思つてな？」

「欲張りだなお前。」

「失礼やな。自分に正直なだけやで？」

「そつえばさっきの気はどう利用したんだ？」

……あー、アレな。アレは……

「……何もしとらん」

「……は？」

「いや、何か繰り返していく内にな？勝手に出て来るようになったわ。」

「いやー、段々痛く無くなったきたて思ってた体見た時ビックリしたなあ。」

「フム、その時何か考えてたか？」

「何を考えてた、か。そうやなあ……」

「……槍や」

「槍？」

「そう、ボクが槍を突くんや無い。ボクが槍になって突くんや。」

昔母ちゃんも言うつとったし。

人槍一体ってな？

「己が槍、か。ああ、お前も結局は美亞の子って事が……………」

「ハハハ……………。それは否定出来んなあ。」

「……………『神鎗』(しんそう)だ。」

「え？」

「お前が槍だと言うなら、その神速の突き、絶対的な命中。……………
…お前は正に神の『鎗』、『神鎗』だよ。」

神鎗、か。

うん、エエな。気に入ったわ。

「はあ、十歳が持つような称号じゃ無いぞ？」

「何や、自分が付けといてそれかいな。」

「他に付けようが無いんだよ。こんな世の中だしな？」

「恐ろしい時代やなあ。怖いわア……………」

「どの口が言うか。… ったく帰るぞ？もう空が赤い。」

「ハイハイ……………」

神鎗、それは神の鎗。オーディンのグングニルや聖人殺しのロンギ

又とか様々な最強の鎧がある。どれも様々な神話、伝説を創り出したそうや。

でもそんな事はどうでもええ。

ボクはただ、守るだけや。

父ちゃんも、母ちゃんも、しいちゃんも、乱ちゃんも、そして今までもこれから出来る大切なモン全てを。

そのためにボクは鎧になる。

皆を守る鎧、絶対的な「神鎧」に。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.
.

第八話 〈birth of the God lance〉(後書き)

- Key Word -

・水兵リーベ

〈皆さんお馴染みの元素記号の覚え歌。「水兵リーベ僕の船シツプスクラークか」という感じだった気がする。

・最年少国家錬金術師

〈漫画「鋼の錬金術師」より。主人公エドワード・エルリックのこと。身長的事なのか年齢的事なのか誰も知り得ない。

第九話 ｛ l i t t l e a r m y ｝

S i d e 張 汎

「頼む汎兄さん！俺達に力を貸してくれ！！」

家で商人のオッサンの依頼で物語を執筆しとつたら目の前で贅瀨君
以下この辺りの村の男の子達が全員で土下座しとつた。

……………えーと、先ずは。

「どないしたん？」

……話を纏めるところや。

賛瀨君は何の因果か珍しい物をしょっちゅう捨てる。けどそれは必ず幼なじみの符慈ちゃんに持って行かれるとった。

賛瀨君だけや無い。他の男の子達も他の子が持ってない物をこくごとく奪われていったそうや。時には言葉巧みに。時にはコッソリと。……. どんだけトレジャーハンターやねん符慈ちゃん。

やから去年。拾った物、大切な物はすぐに自分達が作ったいわゆる秘密基地に保管することにした。お陰で守る事が出来てたそうや。

けど悲劇は起きた。男の子の一人が口車に乗せられてすっかり秘密基地の場所を話してしもうたらしい。

そこでまた奪われる事を危惧した皆は即行動。交代制で保管庫の警備をすることにした。

異常は無かったけど一昨日一通の手紙が賛瀨君の元に届いた。曰く

「賛瀨以下男子共へ。村女子連合軍に攻められたく無ければ大人しくお宝を渡すように。符慈」

と。というところや。

……なんて言うか、清々しいぐらいのジャイアンズムだな。

けどまさか村女子連合軍が動くとはなあ。

村女子連合軍って言うのはその名の通り村の女の子の集まり。それが近くの村と繋がって連合軍になったと言うワケや。

しーちゃんが將軍、乱ちゃんが軍師をやっとる。確か符慈ちゃんは隠密やったかなあ？

まあいわゆる女の子の軍隊ごっこみたいなモンや。意外にキチツとしとる。

でも誇りも持つとるハズや。こんなことでは滅多に動かんと思うけど………

また符慈ちゃんの魔法の言葉、もとい詐欺の力やるか？

あ、そういえば。

「贅瀨君、キミらの保管してる物って一体何なん？お宝って言うほどやから何か気になるけど………」

「ああ、例えばこんなやつだ。さっき拾った。」

さっき拾ったて……………

これは盾やな。少し大きめか？

特徴的にこれは西洋の盾やな。でもなんでこんなトコに落ちとったんやろ？乱ちやんが落としたんか？

ん、文字が刻まれとる。辛うじて読めるな。ギリシア語か、ムズいな。何々？……………

ア……………イ…ギ……………ス？

……………天から落つこちてきとったわ。

けど贗瀨君の収集能力にはビックリしたわ。符慈ちゃんのお宝大好きセンサーに反応するワケや。

さて、どうしたもんやろ？

「頼む汎兄さん！保管庫のやつ一つあげるから！！」

一つだけって言うところは抜け目無いなあ。あんな子が幼なじみや、色々鍛えられたんやろ。

まあ報酬があるってのは良えな。贅瀨君の拾ったやつや、期待は大
きい。

……それにボクのこの「作品」の戦術を実践してみるのも面白い
しなあ？

「ええよ、やったる。」

「本当か！」

「けど報酬は忘れんといてや？」

「ああ！勿論だ！」

贅瀨君の後ろの子達が涙を流して喜んだ。そこまで希望賭けとっ
たんか。

……さて、どないしよか。信長サマ？

ボクは手元の書いてる途中である「第六天魔王伝説」をチラリと見

た。

S i d e 乱（高順）

「模擬戦？」

私は鉄を叩くのを止めて符慈ちゃんに聞き返した。

「そ、模擬戦。贅瀨が男の子達で『村男子連合軍』っていうのを作ったから相手をして欲しいらしいのよ。」

「でも水音、それって最近出来たんやろ？ウチらがすぐ勝つと思っ
んやけど……」

遊びに来ていた霞ちゃんが言った。

確かにそうだ、私達の「村女子連合軍」は作られてもう二年も経つ。
まだ実戦こそは無いもののそれなりにまとまっている。

最近出来たばかりの集団に負ける事は無いと思っけど……

……と言っより、恐らくはまた符慈ちゃんの「お宝」のためだろ
う。はあ、替瀨くんも大変だなあ。

「もう符慈ちゃん、またお宝絡みでしょう？」

「あら、ばれちゃったわね」

「あっさりと認めたね、まだ何かあるの？」

「もちろん これは霞と高順ちゃんにもとっておきの情報よ……」

「へえ、何や何や？」

霞ちゃんがノリノリで聞く。楽しそうだね……………

でも私と霞ちゃんが興味を引くことか……………何だろ？

「フッフ、実はねえ。向こうの軍師が……………汎兄さんのよ。」

……………え？ギンお兄ちゃん？

霞ちゃんもポカンとしている。

私も驚いた。確かに男の人だけでも、こういうのにはあまり参加せずに家で本を読んだり私のところに新しい鉄製品の話に来るからだ。

符慈ちゃんはそんな私たちの様子を見てニヤリと笑った。

「だから汎兄さんがどんなのを思い付くか見てみたいと思わない？」

うん。なんか符慈ちゃんに乗せられているような気がする。

でも汎お兄ちゃんがどんなのを見せてくれるか見てみたいのもある。

前に「将棋」とか「ちえす」とという盤上の遊びをやったりしたがいつも信じられないような戦い方を見せてくれた。

「それに霞と高順ちゃんが汎兄さんに良いところを見せるいい機会だと思っけど？」

隣で霞ちゃんは顔を真っ赤にさせながら両手を頬に当ててクネクネしてる。

そしてハッとしたら

「こうしてはおれんわ！乱！水音！ウチがみんなを集めてくるから策立てときい！ほな、いつてくるわ！」と、全速力で走って行った。あ、相変わらずのお兄ちゃんっ子だなあ。

さて、そんなことを思っている私も。ギンお兄ちゃんに私の今までの成果を見せてみたいと思う。「アレ」も完成したしね。

「高順ちゃんも参加する？」

「うん、私もギンお兄ちゃんと勝負してみたいから。」

「高順ちゃんも汎兄さんの事好きだからね。」

「うっ、うっ、うっさいなあ！」

うっ、顔が熱くなるのがわかるよ。

私は顔を符慈ちゃんに見られないように再び鉄を叩き始めた。

S i d e ・ 符 慈

フフ、照れちゃってまあ。

………何とかなつたわね。

ふう、全く替漕いたらギンお兄さんと手を組んだ時は焦った。しか

もお宝一つですって！？私にはあげないくせに！

この二人を動かすために汎兄さんのこと言っというて正解だったわ、失敗するかと思っただけ。

正直この模擬戦の勝ち負けはどうでも良い。

どさくさに紛れてお宝を頂くって寸法よ。

フッフ、贅瀨？絶対に手に入れて見せるんだから。ね？

t o b e c o n t i n u e d

第九話 〈little army〉(後書き)

- Key Word -

・ジャイアンズム

くドラえもんが登場人物ジャイアントの持論。お前のものは俺のもの、俺のものは俺のもの。といった考え方。ヨーロッパ某国のことわざでもある。

・アイギス

くギリシャ神話より。主神ゼウスが娘の女神アテーナーに与えた防具。胸当て、盾等の形として言い伝えられている。

第十話 ｛l i t t l e w a r ｝(前書き)

ご都合主義満載です。その時代に無いものは外史だから割り切って頂けたら幸いです。

あと文章と戦闘描写H.....

第十話 〈little war〉

賛滯達に頼まれて策を練る事になった張汎。

だがそれに気付いた符慈は張遼、高順を呼び込み着々と準備を進めた。

そして三日後、その時はやって来た……………

S i d e ・ 張 汎

ボクは今賛滯君達の秘密基地におる。

ここらへんは昔一つの村だったらしいが村人達移動して今のボクらが住んどる村を作って無くなってしもうたらしい。

それほど荒れておらず、石造りの家もあったそうやから自分達で補強したりして作ったそうや。

「汎兄さん！来たぞ！」

「わかった。そんなすぐに攻めはせんと思うから後で来るわ。」

「汎兄さんは？」

「ちょっと確認。」

さて、まずは人員。村女子連合軍はおおよそ十五人、まあ子供やし妥当やな。

けどウチら村男子連合軍（しーちゃんがそう呼んでた）は十人程度。しかもこうったチャンバラ物の経験はあまり無い。

戦いのパターンは籠城戦。秘密基地が落とされる、又は元食糧庫に入っとる贅瀨君達の「お宝」が奪われたら負け。女の子達の全滅、もしくは降伏やと勝ちって事になる。

地形は荒野、草一本も無い。あるのは秘密基地だけや。

策は迎撃。贅瀨君達が足止めをするって事になっとる。

「贗瀨君。ボクが言っとったアレ、立てた？」

「ああ、ちゃんと立てたぞ。それともう一つのも出来てる。」

「うん、それで十分や。さて、そろそろ行こか？」

「ああ」

ボク達は秘密基地の前に出た。

向こうでは村女子連合軍、通称「女子連」の子達がある。

あ、しーちゃんが出て来た。乱ちゃんも後ろにおるなあ。

「ギン兄！今日はよろしく頼むで！」

「ギンお兄ちゃん、やるからには負けないよ？」

おお、気合い十分やなこれはボクも返事しとかんと。

「フフフ、エエ目しとるなあ。けどしーちゃんに乱ちゃん、ボクか

「てちゃんと考えとるんやで？」

「……………」

「……………贄瀨君も何か言わんと」

「ハッ！そ、そうだ、負けないぞ！」

あゝテンパとるなあ。ちょっと不安になってきたわ。

「そんなワケやから、そろそろ行くで？」

「うん、絶対に負けへんで！」

「ハイハイ」

「あ、汎お兄ちゃんこの赤い塗料が付いたら脱落だから。」

「わかった」

そんな感じで秘密基地。ボクは今男の子達の前に立つとる。

まあモチベーションはあげさせとかなとな？

「さて、戦いの日がやって来た。キミ達は自分の大切なモノを守るために準備してきた。けど、やっぱり不安か？」

少しだけ頷いている。まあそらそうやな。けど……

「言っとくわ……今回お宝が奪われる可能性は皆無や。」

！！！！！！

皆がざわつく。

「静かに。でも必死に戦わなきゃその可能性が落ちてまう。」

静かになる。子供同士とはいえ必死なんやろな、顔が引き締まってるわ。

「やから皆。今日は嬢ちゃん達に仕返しするで？」

おおー！！！！

よし。上がるとこまで上がったな。

さて、作戦開始や。

S i d e . o t h e r

高順が鍋をお玉で叩いた。開始の銅鑼代わりである。

先ず五人の少女達が突撃を仕掛けた。

それぞれが先端に赤い塗料が出る袋を付けた棒を持っている。

張汎は素早く指示を出す。

「柵立て用意、及び第一投準備。」

落ち着いた。かつハッキリと通る声。

少年達は慣れた手つきで砂に埋めていた柵を出した。

「（なんだろう？守りにしては柵の間隔が大きいけど……）」

高順は疑問に思った。だが少女達はもう近くまで攻めに來ていた。だが少年達は動かない。

「（あそこまで來ているのにまだ動かない。待っているように……）
……！！まさか！」

高順が気付くと同時に張汎が指示を出した。

「投擲」

柵の間にいる少年達が何かを投げる。

少女五人全員に当たった瞬間白い煙が出た。

「キャッー！」

「うっ！なにこれ……」

「ゴホッゴホッ」

「第二投、投擲。」

怯んだ隙に塗料が出る袋（さっき説明の時貰った）を投げる。そして見事命中した。

ここで五人、少女連側の脱落者がでた。

脱落者の一人が高順の元に歩いて来た。

「ゴメン、嵌まっちゃった。」

「いや、私の方も早く気付けば良かったかも。それで何を最初投げられたの？」

「うん、ひび割れてるけど…」

差し出されたのは卵だった。しかし……

「コレ、中身は小麦粉？」

そう、中身は抜けており小麦粉が詰められているものだった。

実は張汎達。昨日は贄瀨の家に皆で泊まりがけで卵の中身を抜き、小麦粉を入れる作業を行っていたのだ。

お陰で昼も夜も、そして今日の食事は卵料理三昧だった。

変わって男子連側。誰も作戦が成功に喜びの声を上げなかった。
今だにじっと構えている。

張汎はじっと少女連を見つめていた。

贄瀨が近寄る。

「汎兄さん、玉の用意が出来た。」

「そっか、しつかり持つとき。皆、ここからが本番や。」

張汎は大きく溜息を吐く。

「乱ちゃんは天才やからなあ……」

彼は高順の「陥陣営」としての片鱗を感じていたのである。

女子連側、高順と張遼は話していた。

「多分、お兄ちゃんはアレをずっと続けると思っ。」

「なんや、あんなこと言っといてそれだけかい。」

「持久戦に持ち込むつもりだよ。昨日お兄ちゃん泊まりに行っただでしょ？あの卵皆で一晩中作ってたらしいよ。」

「……ホンマかい。なら数には困らんってことやな。どないする？
乱っち。」

「『アレ』を使って乱れを作るよ。その隙をしっかりと突いてね、し
ーちゃん？」

「へえ、とつとつお披露目やな。」

「ギンお兄ちゃんを驚かせてやるんだから！行くよ、しーちゃん！」

「うし！ウチもギン兄驚かしたるで。」

Side・張汎

ん？あれは……

「汎兄さん、何か出して来たぞ。」

「確認したわ。」

なんやろ、アレ？少し大きめの馬車みたいなヤツの上に何か乗っと

るみたいやけど……………あ、動いた。でっかいスプーンっぽいのが見えるわ。

……………つて、まさか。

「カタバルト投石機？」

「ん？肩貼ると？」

「いや、ブテナロックちゃう。っじゃなくて贅瀨君、全員後退や。」

あれはマズイ、直接当てて来る事は無いと思うけど。遠距離攻撃は痛手や。

「全員柵の後ろに下がるとき。」

……………飛んで来た！あれは大玉か？

「上から来るでえ、気いつけや」

せっかくやからボクはこの赤の柵を選ぶでーってちやう。しかもでかい大玉に、小さいどんぐりも混じっとるわ。

「どんぐりに色ついてるで。当たらんよんじこやき。」

……うん、止んだみたいや。

誰もあたってらんな、上々や。

……大玉が割れて何か出とるなあ。

赤い、煙？つてまさか！！

「全員鼻と口塞ぎい！唐辛子や」

チィ！何人が吸い込んだみたいやな。予想はしとったけどまさか唐辛子の粉いれとるなんて思わんかったわ。

ワアアアアアアア！

女の子も残り全部攻めて来よった。しゃーない、ここは……

「残りの卵と色玉全部投げろや！後は基地の守り固めとき！」

「汎兄さんは!?!」

「ボクが出る。さあ、決着は近いで。」

S i d e ・ 霞（張遼）

乱つちの開発した「唐辛子星・大玉」を撃ち込んでみたけど、あまり男の子の人数減らんかったなあ。

これもギン兄の指示か。やっぱりまだ敵わんなあ。

さて、でもこれで少しは怯んだはず。作戦道理に………

「全員槍持ちい！！全軍突撃や！！」

一網打尽や！

進んだ先には煙が上がっていた。
どうやらさっきの卵全部投げたみたいやな四、五人色が付いて脱落
してもうた。

……でもえらい先が見えんわ。どんだけ作っとなねん。

「うわぁっ！」

「痛っ！？」

な、何や！？

そして風が吹いた。

辺りが晴れて行く。

そして見えるのは倒れている仲間達。

その中心に。

「やっと二人きりになれたなあ？しーちゃん。」

ニッコリ笑つとるギン兄がおった……………

Side・張汎

お〜ビックリしとる。

面白い顔になつとるわ。

「な、何でギン兄がここに！？ギン兄今日は軍師やろ！？」

「煙に隠れて来たんや、それに軍師が攻めんとは限らへんで？」

「あ、そうか……………って納得せんわ！！！」

中々のノリッッコミャ。でもなしーちゃん……………

「よそ見してもエエの？」

「！！」

ガッ！！

おお、手加減はしとるけど防いだな。正直まだムリやと思っと思ったけど。

「くっ！」

「成長したな？しーちゃん。」

「ギン兄に比べたらまだまだや。」

「当たり前や。ボクはしーちゃんのお兄ちゃんやで？常にしーちゃん的目標になつとかんと。」

「…………じゃあウチの全力見せたる！！ギン兄！いくで！！！」

「フッフ、ええで。かかって来い。」

さて、見せてもらうで。しーちゃんの可能性を……

Side・other

一旦距離を取った後。最初に動いたのは張遼だった。

「ハアアッ!!」

鋭い突き。しかし張汎は体を半歩ずらして難無くかわす。

「まだや!」

突きを放った状態から張遼は槍を横に薙ぎ払った。

ガンッ!

先程奪った槍で張汎は防ぐ。先端から塗料が飛び散った。

「へえ、考えたなあ？」

だが張遼の攻めは終わらない。鏝ぜり合いの状態から柄を始めとして連撃を繰り返す。

ガガガガガガガッ！！

張汎は真正面から受けず避ける、流すの行動に出た。反撃は出来ない。いや、しようとしない。

彼はただ冷静に妹張遼の事を分析していた。

「（反応もよし、攻撃の繋げ方も上手くなってきた。母ちゃんの教育の賜物やな。でも……）」

カァンッ！

一振りです張遼の槍を弾いた。あまりの衝撃に張遼の手に痺れが出る。

「くっ！」

張遼は一步下がった。

「しーちゃん」

突然張汎が語り掛けた。

「なんやギン兄。」

そして張汎はつつすらと笑った。

「次はボクから行くで。」

ヒュッ！

瞬間、一瞬にして張遼の目の前に張汎がいた。

「なっ!?!」

張遼は慌てて後ろへ下がったが……

「遅い」

ベチャッ……

張遼に塗料が付いた。

S i d e · 張汎

「うっ、速過ぎや、ギン兄。」

しーちゃんが頬を膨らましてこっちを見とる。カワエエなあゝ

「でも、目標は出来たやろ？」

「そ、それはそうなんやけど……」

「どうしたんや？」

「こっ、あんな速さまで行けるんかなあって……」

あゝ自信の問題やな。やったら……

「しーちゃんには才能は絶対ある。ボクがそう思ったんや、間違い無い。」

「ホ、ホンマに？」

「ボクがしーちゃんに嘘付いた事あったか？」

「そ、そっかあ。エへへへ」

顔赤くして照れとる。うん、やっぱり持つべきはかわいい妹やな。

「まったく、イチヤイチヤしないでよギンお兄ちゃん。妬げちゃうじゃないか。」

お、乱ちゃんや。

「驚いたで、あの投石機。自分で考えたんか？」

「うん、遠くへ飛ばせるのを考えてたから。今回の実験は成功だったよ。」

「へえ、さすがやな。」

「ところでお兄ちゃん、こんなところにも良いの？」

「ん？何が？」

「符慈ちゃんが見当たらないんだけど、多分秘密基地のお宝を探しに行ったんじゃないかな？」

「ああ、それは大丈夫や。実はなあ……………」

今秘密基地の倉庫は空っぽなんや。」

「え？じゃあお宝は？」

「村が使った食糧庫、秘密基地とは別の場所や。贅瀨君とあと二人ぐらいしか知らん。」

「でもギン兄？符慈っちにすぐ見付かるとちゃうん？」

「それも問題無い。実はな……………」

Side・符慈

……………やられたわね。

まさか移動されてるなんて…………

まあ良いわ。もう目星は付いてる。おそらく東の村全体が使ってた食糧庫ね。

だっ たら早速

ギイイイーバタン

カチャ

へ？

……ま、まさか！閉じ込められた！？

「ちょ、ちよつと！？開けなさい！」

『まさか汎兄さんが言った通りとは……』

「！！その声賛滞ね！？開けなさいよこれ！」

『お前には色々世話になったからなあ？』

「わ、わかったからあー！ちゃんと返すから出してよあー！……」

『反省しとけ』

「いや〜！…だ〜し〜て〜！…！」

Side・張汎

「……と、言うワケや」

「うわぁ、えげつないなぁギン兄？」

失礼な、良い策やろ？

「ま、そんなワケでしーちゃん、乱ちゃん。皆呼んどき。模擬戦はこれでオシマイや、帰るで。」

「符慈ちゃんはどつするの?」

「贗瀨君に任しとる。大丈夫やる。」

「ふん」

……さて、皆帰ったな。符慈ちゃんなんて泣いとつて贗瀨君にくつ
ついとつたわ。なんだかんだ言うてもやっぱり幼なじみなんやなあ。
仲良しや。

さて、ボクも帰るか。でも……………

「……………しーちゃん、乱ちゃん。何でボクの腕にくっつきとるん？」

「いや、さっきギン兄と勝負して足が痺れてもってな、まっすぐ立てへんから支えてな？」

「フッフ、私も昨日は徹夜でアレを作ってたんだよ。だから倒れなように家まで支えて？」

……………ハア、しゃあないなあ。

「家までやで？二人とも。」

家に帰ったあと父ちゃんが「お前……向かいの子だけじゃ飽き足らず妹まで……………」って頭抱えながらつぶやいた。

母ちゃんが「ギン君やったら将来安心やな！」て言った時には大きく溜息吐いとったけど何やったんやろ？

t o b e c o n t i n u e d

第十話 〈Little war〉(後書き)

- Key Word -

・ブテナロック

〈湿布。ピタッと貼る!!

・上から来るで

〈プレイステーション1専用ゲーム「デスクリムゾン」より。コンバット越前のセリフ。デスクリムゾンはファミ通で史上最低のレビユー点数記録を叩き出した。最高(低?)のクソゲー。

第十一話 〈story〉(前書き)

少々遅れてしまいました、すみません。

相変わらずご都合主義です。

第十一話 〈story〉

Side・張汎

かのお宝防衛戦から早一年。ボクももう十一歳ぐらいになった。

わずか一年といえども周りは色々あったわ。

父ちゃんが新しい作物の開発に成功したり、乱ちゃんがバリスタを作ったりや。

そういえばしーちゃんの背も伸びたりしたんやけど、乱ちゃんが全く伸びとらん。

前に「大きくなってもちんちくりんのままかなあ？」って呟いたら頭の横を熱した鉄板が通っていった。

笑顔で「ごめんよ、ちょっと力みすぎたみたいだ。アツハツハツハツ！」「って言った時は恐ろしかったわあ。コンプレックスやったんやな。

そして今日気づいたんやけど、ボクは自分達が住んでいるココ「雁門」から他のトコに行ったことが全く無いんや。

まあ気の訓練だったり、槍の訓練だったりと充実した日々やったからなあ。

この前ボクが書き上げた物語、「第六天魔王伝説」を何処で売るか
って話を商人のオツチャンと話しとった時に気づいたんや。あ、売
る場所は洛陽っておっきな街がある場所に決まったで。

208

さて、今やってる鍛練ももう気と槍の調整ぐらいになった。しーち
やんも乱ちゃんと一緒にどこか行っとる。それに物語も書く気にな
れん。

詰まるところ暇ってことやな。

これはアカン、退屈は自分を腐らすと思う。

というワケで今日は散歩に出ようっていうことにしたんや。まあそ

の気になれば一日で大陸一周できるかも知れんけど色々別の所も見て廻りたい。美味しいもん食べたいしなあ？

思い立ったが吉日。早速出掛けるとしよか。

今回は東へ歩いて行こうと思う。海までは行こうとは思わんけど何時かは行ってみたいなあ。海水から塩とって塩おにぎりとか食べたいわ。

さすがに真っ直ぐ突っ走るワケにもいかんし東へ続く道に沿って行く事にした。

途中擦れ違う人に色々話も聞くことが出来た。どうやらこの先は冀州の常山ってトコに入るらしい。

まさか隣の郡に入っとなんて、周りに夢中で気づかんかったわ。

そういえばさっき三つ編みでブルーメランパンツ穿いとった筋肉質のオッサンが走っとなんかたけど何やったんやろ？でも、何かちよっと寒気がした。お尻が。

つと、常山に入ったみたいやな。兵士サンが立つとつたわ。

ボクはエエけど警戒がちょっと低いと思うなあ。最近は何も多くなつてきとるみたいやし。

でもその賊の発生原因がままならないモンや。ほとんどが元農民で作物が不足やから税が払えずに賊に身を落とせざるを選ないそうや。

現にボクの村も何度か襲撃されたことがある。父ちゃんや母ちゃん、そして村の皆がその度に守った。

ウチの村はある程度豊かやったから受け入れる事も出来たんやけど……まあそれに乗じてきた根っからの盗賊つてヤツもおつたんや。

その時の父ちゃんはホンマに容赦無しやったわ。正確に短剣で腕の神経切つてサツサと紐で縛った。

ソイツらだけ役人サンに引き渡した時に親玉みたいなヤツが騒いだら一言。

「外道に成つたんだ、外道らしく死ね。」

そんな時の父ちゃんはかなり冷めた目をしよつた。やっぱただの文官や無い。特命係長とかそんな存在やつたんやろ、父ちゃんは。

それを父ちゃんに言った時にバツが悪そうに向こう向いたわ。まさか凶星だったとは……

そんな事思ってる内に郡の街に着いたみたいやな。

真ん中にお城があつて、それを中心に展開されてるみたいや。目の前に露店も沢山ある。面白いのが見付かるかなあ？

………お、これ柿の木の種か？庭に埋めよか？

「お姉サン、この種ちょうだい。」

「お姉さんだなんてボク上手い事言っねえ！ちよつと値引きしてあげるわよ！」

おお、チョット得したわ。

露店辺りを見て廻ったけどこれだけでもボクの村よりかなり広い。けど大陸では小さい方らしい。洛陽が何倍も大きいそうや、さっき露店のお姉ちゃんから聞いたわ。

しかしコレだけ広いとなると………やっぱりスラムみたいなモンがあるんやろか？浮浪者が居ても可笑しく無い時代やからなあ。

それに衛生管理もちよつとひどい。犬、馬のフンが転がってる。ウチの村に穴掘って便所作つといて正解やったな。

ここはいわゆる商店街のようや。色んな種類のお店が並んどる。

本屋さんはずが専門店やなあ。古いやつから新しいのまであるわ。ファッション、食事、凶鑑色んなジャンルがそろつとるな。

アレ？この「週刊鉄打」って雑誌に「謎の鍛冶職人『丸順』に迫る！」ってコレ乱ちゃんの事やん。乱ちゃんの作った物には丸描いて中に「順」って書いとるしな、有名になったもんや。記念にコレ買つとじ。

他にも着物、武具、日用品といった色んな物がこの通りには売ってあった。

お昼も過ぎた、自分の影が反対になつとる。ちよつとお腹も空いてきたしどこかで食べよか。確か食堂関係は向ここの道やったな。

へえ、ここも賑わつとるな。お昼やから人がいっぱいや。お店も沢山ある。うーん今日は何食べよ？

麻婆豆腐、炒飯、焼肉と種類多いなあ。どれにしよう？

……あ、ラーメンあったわ。うん、今日はラーメンにしよう。

「すみません、ラーメン一つお願いします」

「へい！ありがとうございます！ラーメン一つ入りましたーッ！！」
中々の活気や。これは期待やな。

……と、待ってるんやけど中々来んなあ。まあ人多いししゃあないと思うけど。期待して待つとる分完全にお腹が空いたわ。

「すみません」

「ん？」

何や？

振り返ったらしーちゃんと同じぐらいの背の女の子がおった。水色のキレイな髪や。

「席が混んでいて空きを探していたのですが……隣りに座っても宜しいでしょうか？」

何や、そんな事か。

「ボクは別にええよ。」

「ありがとうございます。」

「そんなに畏まらんといてや。お腹が空いた時はお互い様、やる？」

女の子はクスクスと笑ってた。

「それは困った時は、でしょう?」

「そうとも言うなあ」

「フッフ、面白い人ですね。すみませんラーメンを一つ、メンマ盛りで。」

「へい!何時もので!!」

ラーメンにも色んな種類があるんやなあ、知らなかった。チャーシュー増し増しって言えば良かったわ。って

「キミ、ここに住んどるん?」

「いえ、この街の近くの村です。」
ふうん、ということとは。

「塾、いや道場か?」

女の子は少し驚いた顔をして答えた。

「はい、此処の道場に通っています。良く判りましたね?」

「まあ背中に背負ってる袋とかな。あと手の豆や、今日は終わった感じやろ。」

あと佇まいとかな、と加えたら女の子の目が光った。あ、コレ獲物を見る目や。

「中々良い目をしていますね、鍛えておられるのですか?」

「あゝまあ逃げ足を少々、かな？」

「そうですか……………」

アララ、ちょっと残念そうになったな。

「へい！ラーメンおまちどうさま！！」

お、ラーメンや。この子の分も一緒に来たな。

「まあ、食べよ？伸びるのも嫌やし……………」

「そうですね、では頂きましょう。」

「そういえば」

ラーメンを食べるのに一息ついてこの子のラーメンを見て思ったんやけど……………」

「そんなにそれ美味しいん？」

メンマが山盛りになっとるんや。うん、もう麵が見えんぐらいい。

「む、貴方はメンマを食べた事が無いのですか？」

「まあ名前だけは知っとるな。食べた事は無いな。」

……は？趙雲？あの趙子龍？

女の子と思っと思ったけどまさかこんなトコで出会っとは……

でも納得や。氣の流れが他人より強い。将来性が高そうやしなあ。

「あの、どうかしましたか？」

つとと、イカンイカン。

「ゴメン、ちょっと考え事しとったわ。ボクの名前は張汎。雁門から来たんや。」

「雁門？此処から北西にある郡ですか？」

「そや、ボクの村から東へ行こうと思ったんやけど道に沿って行ったら此処まで来たんや。」

「かなり遠い筈ですが……」

「言っただやろ？逃げ足早いつて。」

その後も色々話が弾んだ。途中で食べたりしたけどメンマが減らなかった。むしろ増えたように見えたんやけど。増えるメンマか？これ。

「それにしても張汎殿の村はすごい発展しているのですな。私の村と大分違います。」

「まあ適材適所。皆が自分の役割を把握しているからなあ。父ちゃ

んが金勘定、皆が畑を耕す、友達が鉄を打ったりしとるわ。」

「成る程、しっかりと役割を分けているのですね？」

「そういつコトや。」

「しかし、そのような案を誰が考えたのですか？」

………あ、返答に困るな、コレ。どないしょ？

「あゝ、それは」

ガシャーーーーーーン！！

「なんだココのメシはあ！？」

なんや？

S i d e ・ 趙雲

私はここで知り合った張汎殿と話をしていた。

聞けば郡を越えて此処まで来たらしい。

行商の息子かと思ったが本人曰く「散歩で来た」そうだ。

初めは冗談かと思ったが嘘は言っているようには見えなかった。

容姿は線が細く、目も細い。張り付けたような笑顔から最初に見た時は「蛇」のようだった。見た目で人柄を決めるつもりは無かったが少し警戒してしまった。

しかし、話をしてみるとそれは無くなった。張汎殿の話が面白かったのだ。

内容は村の男女間での戦い、彼の妹の話等だった。

彼の村の話は興味深かった。他の村とは一色違った政策を行っているらしい。私の村はそれなりに税を納めているが、彼の村はかなり余裕があるそうだ。時折他から流れて来る人々を受け入れる事もするそうだ。

そして今、誰がその村の中心にいるのか聞こうとしたのだが

「なんだココのメシはあ!？」

男がいきり立っていた。食堂内の人々の困惑の視線が集まる。まったく、なんなのだ？

ヒラヒラと手を振りながら男達の所へ行ってしまった。

……………「ひと」とは一体何だ？

Side・張汎

まあ、一言言いたい。この賊のオッサン達は脳筋なんか？

そう言いたい衝動を抑えながらボクはオッサン達の所へ近づいた。

「とにかくこんなモン出されたんだ！迷惑料払いやがれ！！」

「だから私どもは　　」

「まだ言いやがるか！？それなら俺達にも考えがあるんだぞ！！」

……………あゝメンドいなあ。でもこのままじゃどうしようもない。早くして。」

「じゃあ、頼むわ。」

かの趙子龍となるこの子。ちょっとその実力を見せてもらおうか？

S i d e ・ 趙雲

張汎殿が私の後ろに下がった。逃げ足が速いそうだから隙を見て逃げてくれれば良いのだが……それにこの練習用の槍が何時までもつか。

「嬢ちゃん、大人しく捕まりな。そんな木の棒じゃ戦えねえよ。」

あの男が笑いながら言うてくる。

「黙れ、貴様らのような獣に槍を振るうことすら汚らしい。これで十分だ」

男達が殺気立った。

ッ！これが闘いの空気が、初めて体験したが重い空気だ。

今まで鍛練してきたがこういう命に関わる事は全く無かった。

村や道場では負け知らずだった。大きい大人にも勝てるようになった。だがそれは訓練での話。これは正真正銘の殺し合いだ。

男達が一斉に襲い掛かって来た。それぞれ剣を持っている。

防ぐことが出来ない、ならば！！

シュツ、ドン！！

「ゲエツ！」

流して突くしかない。

一人気絶した。だがあと四人、油断は出来ない。

「チツ、同時にかかれ！どうせ一人しか戦えない！！」

まずいな、後ろには張汎殿がいる。同時にかからればひとたまりも無い。ここは……

「張汎殿、私の後ろにしつかりと付いて来て下さい。」

「了解や」

私は目の前の男に駆け出した。

「なっ!?!」

男がたじろいで後ろに下がる。そこだ!!

ズドン!!

「グウツ!」

上手くいった。さて、あと三人

「このガキい!!」

ガッ!.....ミシイ.....

「クツ、ハアア!!」

ドン!!

「ガハツ!!」

バキッ!

クツ、折れてしまった!

「そこだア！！」

後ろ！防げな

キイイイン！！

え？

「見せて貰ったで、趙雲ちゃん。」

そこには素手で相手の剣を防いでいる張汎殿がいた。

「張、汎、殿？」

彼は何時もどつりの笑顔でこっちを向いた。

「選手交代や」

Side・張汎

……………アブなかったなあ。趙雲ちゃんの槍が訓練用やったのを
失念しとったわ。

ボクは今手に気を纏って受け止めている。端から見れば素手に見えるやろ。強い一撃やったらもつと固めにする必要があったケド、まあ杞憂やったな。

さて、今日の前に一人後ろにもう一人ってトコか。これは気は必要

無いなあ。

「はいな」

目の前のオッサンを押し出す。後ろに崩れた。お粗末な構えや。

「ウオオオオオオ!!」

声なんか出さん方がエエのに、丸わかりやん。それに鈍いわ。

「それ」

剣を持っている腕の袖を掴む、そのまま背中に抱えて投げた。

ドンッ!

「ぎえっ!!」

はい、気絶。話にならん。

「じ、この野郎」

そう言いながら立ち上がる最後の一人。でもそんなに立つのが遅いと……

そして別れ道に着いた。

「此処までですな。」

「ああ、そうやな。趙雲ちゃんは向こうやったな。」

「……………星です。」

「ん?」

「私の事は星とお呼び下さい。」

「あ……………それ真名やろ?ええの?」

「メンマを頂き、面白い話もして頂き、そして命を助けて貰いました。真名を預ける理由としては十分ですよ?」

「最後はボクのせいと思うけど……………」

「それでもです。」

「……………わかった、ボクの名前は銀。受け取って貰えるか?星ちゃん。」

「ッ!……………勿論です。ギン」

そう言って星ちゃんはニッコリ笑った。夕日が射してしてその笑顔
をより綺麗に表した。

ウン、やっぱり女の子の笑顔は素敵や。

「さ、早く帰らな。星ちゃん、ボクの村にも遊びに来てや?」

「そう言うギンこそ来てくださいよ?」

「フッフ、何時かな。ほな、さいなら。また会おうな?」

「はい、では……………」

そうしてボクらは別れた。

「……………って!空暗くなり初めとる!!!アカン、遅う帰っ
たら飯抜きにされる!!!」

ボクは夕日に向かって走って行った。

S i d e ・ 星（趙雲）

叫び声が聞こえたので振り返ったらなにやら慌てた様子で張汎殿、いやギンが走って行った。

そんな彼の小さくなっていく背中を見て思い出す。あの私に迫る剣を防いだ時のこと。

あの男達を無手であしらう程の強さ。本人は武術をやってないとは言っていないが、あそこまで強いとは思わなかった。今の私では勝てないだろう。

けど私が思い出すのはそのようなことでは無い。

防いだ直後、私に向けたあの笑顔。

それは張り付けたような笑顔ではなく、心から安心させるような笑顔だった。

「フフツ」

顔が熱くなり帰り道を歩く足が弾む。今日は本当に楽しい一日だった。

今頭に浮かぶのはギンの事。彼の事をもっと知りたい、彼ともっと話したい。色々な欲求が出て来る。

今度彼の村へ行ってみよう。そして彼に会おう。じゃないとこの胸の動悸は収まらない。

なぜなら私は彼の、あの振り返った笑顔を見た瞬間に彼に恋をしてしまったのだ。

S i d e ・ 張 汎

ボクは今家の外に居ます。

あ、日が落ちる前に帰っ来たんよ？けどなあ……………

「ギンぐうぐん！よがったよ」

「ギンにいくしんだとおもっだ」

ボクが急にいなくなったもんやから村総出で探したそつや。けど見
つからんで重い空気でおったと。

そんで今しーちゃんと母ちゃんがしがみついて号泣してる。

父ちゃんが呆れた顔でこっち見とる。

「はあ、それで今まで何をしていたんだ？」

「常山郡の街へ散歩しに行ったんや。」

「……………は？」

「いや、やからじょう
ズガン！」

「

父ちゃんのブ厚い辞書で叩かれたあとボクは飯抜きになった。

しーちゃんがくれた枝豆がしょっぱく感じたわ……………

t o b e c o n t i n u e d

第十一話 〈story〉(後書き)

- Key Word -

・ハイジ

〈アルプスの少女。アニメで放送された。実写版にはペーターとのキスシーンあり。

・曙スタイル

〈K-1にて曙がノックアウトされた時の格好。お腹に両手を添えてがに股で前へ倒れる。

第十二話　く　m a d　s m i t h　く　(前書き)

ゴリ押し感が強いです。

今回は完全にオリキャラ化した高順の説明回のようなものです。

第十二話　↳ Mad Smith　↳

早朝。

ここは雁門のとある村。

一つの鍛冶屋があった。

そこで一心不乱に槌を振るう少女が一人。

カン、カン、カン、

テンポ良く響く鉄を打つ音。

ジャツ、ジャツ、ジャツ、

乱れの無く鋭い表面を擦る音。

キチキチ、キチキチ、

一定の間隔で鉄を嵌め合わせる音。

カン、カン、カン、

そして音はまた繰り返す。

それは鉄の交響曲。

その鍛冶場は少女による演奏が流れていた。

彼女の名は高順。

純粹な「天才」である。

Side・乱（高順）

「ふう、」

やっと半分だ。

私は今ギンお兄ちゃんの考えた「ぼうがん」と言つのを作っている。

これは力の無い人でも使える弓のようなものだ。

でも中々部品が多い。

これはまだ時間がかかりそうだなあ……………

私がこうして鉄を打ち始めたのは五年前、私がまだ五歳の時だった。

………おっと、感傷に浸かっていたねえ。休憩はここまでだ。今日は作った「この子達」のお披露目だから急いで作らないと！

「ウッフッフッフ………」

そして私は笑いながら鉄を叩く。

我が子達が生まれるのを感じながら。

そして今日来る想い人に心を踊らせながら。

皆歪んでるって言うてたけどじゃあギンお兄ちゃんの「歪み」って何なのかな？うっん思い付かないや。

まあけれども……

「そんなギンお兄ちゃんの全てが、私は大好きだよ。」

私は手にある鎚を見ながら呟いた。

神に祈りを捧げるつもりでも無く。

私に掛け替えの無いものを与えてくれた人を想いながら。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.
.

第十二話 ｛mad smith｝(後書き)

- Key Word -

・がんだむ

｛機動戦士ガンダムより。かの親父にも殴られた事のない人が乗るロボット。張汎が作ったのは初期ガンダム。

・歓迎するよ、盛大にね。

｛Armored Core for Answer 通称ACf Aより。名(迷?)言の一つ。

第十三話 〈readiness and clash〉(前書き)

大変遅れてすみません、テスト期間なもので……

今回もオリジナル要素及びご都合主義な展開です。気をつけてください。

「ちなみに村全体がこうなる予定だぞ？」

「……………マジで？」

「大まじめだ」

頭を抱えながらため息をついている。そんなに問題か？

「まあとにかくさっさと家に入れ。お前の話を聞きたい。」

家に入ったら案の定、美亜が槍を磨いていた。……………ってなぜ泣いてる？

「霞ちゃんが槍をやめてもうた霞ちゃんが槍をやめてもうた霞ちゃんが槍をやめてもうた霞ちゃんが槍をやめてもうた霞ちゃんが槍をやめてもうた霞ちゃんが……………」

……………」

あー、そういえば。霞が別の武器も試してみたいから高順ちゃんの工房に行くって言ってたな。まったく、辞めた訳ではなかるうに。

「美亜、今帰った。」

「やめてもうた、って羽間くん？気付かんかったわ。今日は畑仕事やったんちゃう？」

「いや、コイツが来てな。」

「おう、相変わらずだな？槍っ子。」

「……………誰？このオッチャン」

ああ、コイツ今日はすっぴんだったな。何時も仮面付けていたから。

「『蛇』だよ、昔俺と同じ『特命隊』だった。」

「え！？ホンマにあの蛇くん？もつと若いと思っと思ったわ！」

「ひどいな、まだ羽間と同じ年だぞ？」

「まあお前は老け顔だしな。」

「夫婦揃ってすき放題言いやがって……………」

三人で丸机を囲んで椅子に座った。コイツの話の聞くことにしたからだ。

「さて、報告したいことなんだが…………手紙読んだか？」

「一応読んだ。といっても一文だけだったが。」

「『暗雲来たる、金の卵狙いしは十の狐』だったか？」

「意味はわかったか？」

「金の卵は靈帝の子、十の狐は十常侍の連中か？」

またあのタマ無し連中はなにかする気か？勘弁してくれ、しかも劉宏様絡みで。

「ご名答。靈帝殿、まあ劉宏様の命令でな、宦官全員の調査をしてとんでもないことが発覚した。」

「なに？またあのイヤラシイ爺達が何かするん？ホンマにメンドいんやけど。」

「あの時は何時もの事だった、もう慣れてしまったよ。でそのとんでもないことって何だ？」

そして蛇は周りを見回した。そんなにヤバいのか？

十常侍、宦官の連中は生殖機能を失ってる分権力を欲しがらる。それも貪欲に。手段は問わず、人質暗殺何でもだ。靈帝の毒殺、と言ったものも過去に何度かあった、未然に防ぎはしたが。「特命隊」がまだ前のままだったら大丈夫かも知れないが些か不安だ。

そして劉宏様の子、確か何進の小娘の親戚との子がいたな…名は劉弁だったか。そして人づての話では側室の子がもう一人、そちらの名は確か劉協。後継ぎとしては劉弁様が有力だったが。劉協様にもその権利は少なからずある筈だ。それにまだ二人とも四、五歳ぐらいの子供だ。政まつりごとに関わるような年齢じゃ無い。

十常侍、権力、靈帝の子、後継ぎ、もう一人の靈帝の子……………

まさか。

「……………劉協様を、靈帝の子を操り人形にする気か？」

「！……！」

蛇の目が鋭くなる。……………これは「びんご」（大当り）って事か。

「……………その通りだ、十常侍の連中のみで行うらしい。」

「手段は？」

「劉協様は宮中では孤立している、まあ正式な子では無いからな。」

「そこでお友達作戦ってわけか。」

「子供巻き込んでまで権力が欲しいなんて……………狂つとる。」

隣で美亜が拳を握り絞めてる。優しいやつだからな。

しかし、俺が城を出た時はまだ劉協様は元気だった。まだ現役なのだが……………

「劉協様はどうした？特命隊がいるから毒は盛られて無い筈だ。」

「……………病だ。」

「……………何時からだ？」

「冬を越してからだ、突然倒れた。宮中の医者でも無理だった。たまたま来ていた五斗米道の使い手が診てくれた。」

「気による治療の専門家ねえ、元気にならなかったのか？」

「一時はな、すぐに元の状態になってしまった。使う気の量が多過ぎるから連続で出来ないそうさ。」

「……………長くは、持たないのか？」

「抑えることもできずに臓器を『何か』が侵食しているらしい、持つて……………五年といったところか。」

「それを嗅ぎ付けた玉無し共が動き始めた、って事か。」
「そういふ事だ。」

……………まずいな、このままだと国がひっくり返るぞ。最悪、大きな反乱が起きるかも知れん。予見はしていたがまさかこんな大陸規模だったとは。

「蛇くん、特命隊は動けへんの？」

「そうしたい所だったんだが……………宦官の一人に少々感づかれた。」

「宦官にだと？まずったのか？」

「いや、そいつが規格外だった。他の宦官共より優秀でかなり鋭い。」

「始末でき無かったのか？」

「しようとしたが……………ヤツが死んだら俺達の事がばれるように仕組んでやがった。」

そんな化け物が宮中にいるとは……………危険だな。俺や美亜の事も知られるかもしれない。

「そいつの名は？」

「……………張讓。十常侍の一人だ、実質的には奴が中心になっている。」

「俺が宮中にいた時はそんなヤツいなかったぞ？」

「最近有名になったからな、一月で十常侍の中心に立ったよ。宦官の中では珍しく欲が無い人間だ。」

「そのぶん何を考えているかわからないってことか……………」

「面倒極まりないだろ？」

欲が無いって事はその人物の目的、理想がわかりにくくなる。だから目的が認識し辛いのだ。

「……………で？蛇、お前が来たって事は俺に特命隊に戻って事か？」

「そうしたいんだが……………劉宏様もお前に会いたがってる。戻れないか？」

「無理だな、その張讓にすぐ感づかれて何かしらの行動を起こされ

るだろう。何進側の暗殺とかな。それに俺には美亜や家族がある。迂闊なことは出来ん。」

「羽間くん……………」

「やはりか……………どうしたものが。」

「ボクが行ったら良えんとちゃう？」

S i d e ・ 張 汎

暇つぶしに村全体の掃除しようと思って、終わったから帰って来たんやけど……………なんかややこしい事になつとるなあ？

「お帰りギン君、お掃除終わった？」

「美亜、そういう事じゃ無くてだな……………ギン、どこから聞いた？」

「金の卵からや」

「ほとんどじゃねえか……………」

まあ途中から入る雰囲気や無いし。盗み聞きみたいになってもうたわ。

「おい羽間、こいつは？」

「ああ、蛇サンはじめまして。いや、さっきぶりかな？この家の長男、張汎と申します。」

「は？娘さんだけじゃ無かったのか？さっき見掛けたんだが……………」

「霞ちゃんのこと？あの子は張汎っていうんよ。」

「へえ、ってこの目つきは羽間だな。」

「余計なお世話だ。」

まあ親子やしな？

「ったく……………それでギン、お前が行くとはどういうことだ？」

「ああ、父ちゃんは向こうでは顔知られとるんやろ？それだったら知られとらんボクが行って解決すればええと思うんやけど。」

それに気も使えるしなあ？隠匿の術も一応あるし。

って母ちゃんそんなに睨みつけんというて。

「おい羽間、子供の遊びじゃ無いんだぞ？そんな危険なことさせるわけが無いだろ。」

「あゝ蛇、一応言っとくがギンは俺より強いぞ？」

「……………嘘だろ？」

「本当だ。しかしギン、お前も急にどうした？村を出る気は無かった筈だったか。」

「いや、ちょうど洛陽へ行きたいと思うてな？向こうに探しモンもあるし……………」

父ちゃんはボクの目をじつと見た。

やっぱり「本当の目的」はバレるかもしれんなあ？

そして父ちゃんは僕の真意を読み取ったみたいでため息をついた。

「はあ、まったくお前は どうして何時もそう不器用なんだか……………おい蛇、こいつを連れて行ってくれないか？」

「羽間くん!？」

さっきまで黙っとった母ちゃんが立ち上がって声を上げた。

「羽間くんギンくんを向こうに、あんなトコに行かせるつもりか！
？ウチは反対やー！」

「どうどう、落ち着け。で、蛇。どうだ？」

「……………技術はあるのか？」

「全盛期の俺以上だ。」

「フム、それだったら欲しいところなんだが……………」

「蛇くんまで！ギンくん死なせる気か！？ウチは絶対に
「美亜！ー！」

母ちゃんの動きがピタッと止まった。

ボク父ちゃんが大声出すトコ初めて見たわ……………

母ちゃんは糸の切れた人形のように床に座り込んだ。

「どうして？どうして行かせようとするん？羽間くん一緒に洛陽出
た時に言っただやん、『一緒に平和に暮らそう』って。」

「美亜……………」

「ウチはもう何も要らん、お金も、地位も、名誉も。ただ家族と暮
らしたいだけなんやギンくと霞ちゃんとそして羽間くん……………
もう何も失いとう無いんや。」

……家族に関する事になると母ちゃんはすぐに泣く。これは母ちゃん昔に原因があるらしい。

昔まだ三歳の頃に何者かに両親が殺されてひたすら生きるために槍の腕を鍛えたそうや。

それ以来家族という存在に敏感になっただけらしい。

「……………」

父ちゃんが母ちゃんの前にはしゃがんで頭の上に手を置いた。

「羽間くん……………」

「一回、ギンと打ちあってみる？スッキリするぞ。ちょっと準備してくる。」

そして玄関に向かって行くときにボクに囁いた。

「お前の覚悟、見せてやれ。」

……………成る程なあ。

S i d e . o t h e r

張汎の家の裏手。張汎と彼の母、美亜は互いに槍を持って向き合っていた。

「……………」
「……………」

お互い喋らない。それを父、羽間と旧友である蛇は見守っていた。

「……………」

美亜が最初に動いた、鋭い突きを放つ。

「……………」

それを冷静に張汎は流した。すかさずカウンターの突きを放った。

「フッ！」

美亜は体を傾けて逃れる、槍を横に薙ぎながら後ろに下がった。

「
.....
」

再度二人は睨み合う、そして激突した。

本来ならば張汎が勝つだろう、それだけのレベルに彼は達している。

しかし、彼が望んでいるのは勝ちでは無い。想いを、覚悟を示すのを彼は望んだ。

故に彼は槍を振るう、母に想いを伝えるために。

薙ぎ払う、突く、防ぐ、流す、その打ち合いの応酬はまだ続く。

だがそれは武人の勝負のような雰囲気では無かった。

それは一つの対話。

子が母と他愛ない話をするように見えた。

そして美亜は感じ始めていた。

息子、張汎の覚悟を.....

S i d e ・ 美 亜 (母)

ギンくんが槍をを突く。

それを受け止める。

重い突きや無い、けどなぜか重く感じる。

ギンくんの目を見る。いつもの糸目がちゃんと開いてこっちをまっすぐ見ていた。羽間くんの目と似てる。

ウチは恐い。ギンくんが強いのはわかつてる。けどどうしようも無く恐いんや。

もし死んでしまったら、と思うと心が苦しくなる。だから行かせたく無かった。

けどギンくと打ち合ってたんだん感じてきた、ギンくんの覚悟を。

だからギンくんは行くだらう、絶対に。またウチらを守るために。

不器用な子や、そこも羽間くんに似とる。

だから悲しかった。その重荷を分けて欲しかった。自分の大切な子、一緒に支え合わないでどうするんや。

私は槍を突いた。

最高の速度で、最高の間合いで。

キーンッ！！

気付いたら槍の半分が無くなった。

目の前でギンくんがニッコリと笑った。

「母ちゃん、ボクはその気持ちで十分や。心配かけてゴメンな？けど、ボクは大丈夫。絶対に死なへん、必ず帰ってくるで？」

ああ、これは完敗やな……………

そないなこと言われたら止められへんやん。

私はただ笑いながら涙を流した。

けど、心の中はスッキリしていた。

S i d e . 張 汎

母ちゃんとの打ち合いが終わり、一日が経った。

蛇のオツチャン曰く急ぎなので早く洛陽に戻りたいとのこと。なので急ではあるがボクは今日村を出ることになった。

昨晚そのことを聞いたしーちゃんと乱ちゃんが酷かった。しーちゃんは私も行くって言うて号泣。乱ちゃんはハンマーでボクの足を砕いて行かせないようにしようとした。ホンマに恐かったわ。

村の皆には行商に着いていって見聞を広めると言うことで話が通った。

そして今、村の門におるんやけど……………

「ギンくんちゃんと水筒持ったか？弁当も大丈夫？砂が舞うところもあるから目を大切に？あと帽子と靴……………」

うん、遠足みたいやな。父ちゃんが後ろで頭抱えとる。

「ギンにい！お土産お願いやで！」

「はいはい、わかるとるよしーちゃん。」

「早く帰って来ておくれよ？私の子供達はまだ増えるんだから。」

「フフフ、楽しみにしとるで？」

「さて、そろそろ行くぞ。」

蛇のオッチャンが馬に乗った。ボクももう一頭の馬に乗る。

「ギン、これ持ってけ。」

「父ちゃん、これって……………」

「備えあれば憂い無しってな。……………気をつけろよ。」

言っただけ言っただけ父ちゃんは後ろに下がった。

「張汎、準備はいいか？」

「ええで。」

「よし、すぐ行くぞ。」

皆と別れて村が遠さがっていく。前を見ていたら声が聞こえた。

「ギンくーん！ー！ってらっしゅーい！ー！」

振り返ら無かった、必要無いから。というか恥ずかしかった。蛇のオツチャンも隣でニヤニヤしとる。腹立つわ。

ボクは目の前に広がる地平線を見つめながら呟いた。

行ってきます、と。

The first chapter
「BEHIND」

Go to next chapter

第十三話 〈readiness and clash〉(後書き)

- Key Word -

・今回はネタ無しだったので軽くあとがきを。

くええ、だいぶ間を開けた投稿でした。主人公の進路に悩んでいたものだったので。とりあえずオリジナルの機関をつくってギンくんを洛陽まで引つ張るって事にしました。無理矢理感が否めないですが(汗) まあ軽くスルーしてください。

さて、このチャプター「Beginning」という事でしたが。まあ題目通り始まりって事ですね。主人公の形成期間でした。まあ軽い話がキャラエディットです。軽くチートになってしまいました

が。
詳しい話はまた次回ということだ！さようなら！

第一章 〈Beginning〉 設定資料(前書き)

ただいまテスト期間中なので次回の更新は八月中旬の可能性が高いです。

言い訳申し訳ありません。

とりあえずBLEACHのUNMASKED買って衝動的に書きました。

これ見ながらニヤニヤして妄想しちゃってください。

では、ごじぶぞ。

第一章 〈Beginning〉 設定資料

名：張汎ちようはん

字：文芹ぶんきん

真名：銀ぎん

所属：雁門群馬邑県

誕生日：9月10日

身長：150?

体重：39kg

容姿：BLEACHの市丸ギン（少年期）

使用武器：パルチザン

二つ名：神鎗しんそう

本作の主人公。幼い頃から様々な「知識」というのを予め持つており、本人はそれを前世の「知識」と考えている。妹の張遼が一度危機に陥った時に、周りの時間を遅くし自己の速度を上げる「神速」の世界を手に入れる。その後父との修業により氣の技術を身につけ、更に「知識」をフル活用し父と共同で約百種類の氣の技を作り出す。同時に「神速」を完全に使いこなした槍の技を見せ、父より「神鎗」と評された。

ある目的のために洛陽へと向かうことになった。

名：張遼
ちやうじやう

字：文遠
ぶんえん

真名：霞
しあ

所属：雁門群馬邑県

誕生日：3月6日

身長：143?

体重：30kg

使用武器：槍

容姿：原作と変わらず

張汎の妹。通常の史実では男だがこちらでは女性となっている。基本脳天気だがしっかりとするとところは気持ちの切り替えが早い。槍の腕も大人顔負けだが、新しい武器を模索している。兄妹仲は良好、少々張遼のスキンシップが行き過ぎている傾向がある。

兄が村を出て、より一層鍛練に打ち込むようになった。

名・字：不明

真名：羽間はなま

所属：雁門群馬邑県

誕生日：4月11日

身長：185?

体重：75kg

使用武器：ナイフ

二つ名：特命文官ハザマ

容姿：ブレイブルーのハザマが黒髪になった姿

張汎と張遼の父。元々靈帝に仕える文官だったが宮中の不穏な空気と時代の流れを読み、妻の美亜と一緒に洛陽を出る。文官といえども「特命隊」と呼ばれる特殊な隊に所属していたためかなり強い。氣の扱いにも長けており、息子の張汎と開発を続けていくうちに昔より強くなってしまう。趣味は開発、園芸、建築、農耕とかなり多彩で村の発展に貢献している。これは他人とは違う発想の豊かさ

が一因である。張汎の「知識」の内容を知ることにより拍車がかかり、とうとうログハウスまで建ててしまった。二つ名は隊と同時に文官を行っていたため。

旧友の「蛇」に張汎を託した後、村の開発により一層力を入れている。村の民家ログハウス化計画進行中。

名・字：不明

真名：美^み亜^あ

所属：雁門群馬県

誕生日：11月7日

身長：157?

体重：47kg

使用武器：槍、剣

二つ名：槍女^{やりめんな}、槍將軍^{やりしやま}

容姿：張遼の目が垂れ目で髪が腰まで長くなった姿

張汎と張遼の母。元々武官だったが夫の羽間に着いて行き、共に

洛陽を出る。狂信と呼べるほど槍を愛しており槍將軍と評された。まだ幼い頃に両親を殺され、一人で生きていくしか無かったので家族愛に飢えている。なので家族の異変には人一倍どころか人三倍敏感。槍への依存も強くなければ生きていけない世界の中で槍の技術をひたすら磨いていき、もはや槍が自分の半身に近い存在になったため。普段は良妻で家族の食事を作っている。二つ名の槍女は二つの読み方があるが片方は槍への狂愛から「私、私が槍や!!」と宮中の訓練場の中心で大声で叫んだ事から「やりおんな」、もうひとつは華麗であり力強い槍捌きから純粹に尊敬の念から「そうじょ」。ちなみに本人はどちらも気に入っている。

現在張遼をどうやって槍の道へ引きずり込むか模索中。羽間がたまに聞いた「洗脳……いや、調教……?」と、呟いていたのは気のせいだと思いたい。

名：高順

字：公台

真名：乱らん

所属：雁門群馬邑県

誕生日：7月7日

身長：130?

体重：25 kg

使用武器：ホースマンズ・ハンマー、クロスボウ、バリスタ、カタパルト、その他諸々……

二つ名：まるたか丸高

容姿：めだかボックスの不知火 半袖

張汎の向かいに住む鍛冶屋の一人娘。性別はもちろん史実では江夏群竟陵の出身だったが、こちらでは両親の出身となっている。いわゆる「天才」というもので様々な疑問にも答え「のみ」頭に浮かべる事が出来た。本人はその才能に苦悩したが、張汎の様々な「知識」からの疑問で初めて「考える事」が出来、解決する。その後鍛冶に魅了され、様々な物を開発していく。作った作品を「我が子」として溺愛し、つねにメンテナンスを怠らない。張汎の「知識」の影響もありその時代では通常有り得ない、まだ存在していない兵器、武器まで作る。一時張汎がタイムパラドックス等の影響を考えたが「アレ？しーちゃん、乱ちゃん女の子になつとる時点でもうどうでもええんとちゃう？」という事で解決した。興奮すると周りが見えなくなり、ネジ、工具、武器などとさも当たり前のように会話するという奇行にでる。身長関係を気にしているので、本人の前では禁句となっている。二つ名は自分の作った物に（まる）のなかに「高」と彫り込んであるため。

現在両親、羽間と共同で「火薬」の案件を行っている。しかし必ず爆発 浪漫 浪漫とは？と、いった具合で、必ず話が逸れていき開発の目処が立たない。

名・字・真名：不明

通称：蛇[☆]

所属：洛陽特命隊

誕生日：不明

身長：180？

体重：81kg

使用武器：素手、ナイフ、弓、剣、その場にあるなら何でも。

二つ名：隻眼の蛇

容姿：メタルギアのネイキッド・スネークの髪を少し白くした姿

張汎の父、羽間の旧友。現在も尚、存在する特命隊をまとめている。隠密や暗殺、破壊工作にずば抜けて長けており、羽間曰く「一人で城を落とせる」らしい。ある程度武術も嗜んでおり、自分の仕事に合うように独自の武術を組み立てた。食事に無頓着で野草、動物、木の実等を毒性の有無にこだわらず何でも口に入れる。土も食べたことがあるという噂まである。二つ名の由来は片目の眼帯。

洛陽の霊帝の身に危機が訪れたため、羽間の息子である張汎を協力

者とつて連ねて行く。

第一章 〈Beginning〉 設定資料(後書き)

- Key Word -

・特命隊文官ハザマ

〈完全にドラマ「特命係長只野仁」。決してすぐ別の女性と寝るような浮気性は羽間にはありません。

・私、私が槍や!!

〈ガンダム00の刹那・F・セイエイのセリフ。彼はガンダムへの想いだったが今回は美亜の槍への想いから決まった。

第十四話 く Wake and girl く (前書き)

大変遅れてすみませんでした。中旬どころかもう下旬ですね…………

今回はこのようなことにならないよう気をつけます。

前半真面目、後はおふざけといった感じですよ。ご注意を。

第十四話 〉Wake and girl〈

Side・other

何も無い荒野、そこに張汎は立っていた。

周りを見ても何も無く、ただ凹凸の少ない赤い大地と鉛色の空が広がっていた。声も響かず、風も無く、伝わる感覚は重力だけであった。

ただ立っているだけなのも少々気分が晴れないので張汎は歩くことにした。

歩く、歩く。

雰囲気が変わってきた、肌に僅かな熱さを感じた。熱が伝わってくる方向へ足を進める。その熱はだんだんと大きくなっていく。

歩く、歩く。

地平線線の向こうに小さな丘のような影が見えた。張汎の足が無意識に足が早まった。引き寄せられるように。

走る、走る。

丘が大きくなる、近づいてる証拠だ。しかし丘の色は黒いままであ

合成音声のようであった。

「ココって一体何処なん？」

張汎の質問に騎士は首を横に振る。

「貴方なら分かる筈です。とても近い場所なのですから。」

「近い場所？それってどういう

強い風が吹く、砂塵が舞い張汎の視界を遮っていく。騎士は動じる事も無く真っ直ぐと立ち、空を見上げた。

「今回は時間が足りなかったようだ……………残念です。」

「ちょ、ちょい待ちい！アンタ一体誰や！？」

騎士は静かに兜を脱いだ。薄れる視界の中、微笑みを浮かべた薄い桃色の唇だけが目に映った。

「我が名は、貴方の

Side・張汎

「……………い……………ん……………ろ。つい……………だ……………だ、ま
つ……………きん……………おい！起きろ張汎！」
「……………んあ？」

目の前には無精髭を生やしたオツサン、もとい蛇のおっちゃんか覗
き込んでいた。

「アララ、蛇のおっちゃんどないしたん？」

「どないしたって……………お前馬に乗りながら寝てたぞ？」

「……………落ちんかった？」

「落ちるものにも馬を操っていたから気づかなかったんだが。お前
の特技か？」

「そんなアホな特技身につけた覚えは無いやけど……………」

「羽間も色々と規格外だったがお前も大概だな……………」

「自覚しとるから気分悪いわ……………」

アカン、なんだかだんだん鬱になってきたわ。ポディシブにいかん
と！話の転換転換！

「へ、蛇のおっちゃん！ボク起こしたってことは何か用があったん
とちゃうー!?」

「ん？あ、ああそうだった。そろそろ洛陽が見えてくるから荷物の準備しておけ。馬は着いたらすぐに売るから。」

「既には連れていかへんの？」

「足が着くんだよ、俺が出入りした痕跡を残したく無いからな。任務でも持って行くのは服と短剣一本、あとは現地調達だ。」

「……………道中いろんな話聞かせて貰ったけど、ホントこのオツサン規格外や。一人で城落としたりとか、西からきた巨大兵器の破壊とか、電撃の仙術使いとの戦いとか。もう慣れてしもうた。」

「とりあえずこの服とコレを持っておけ。」

そして目の前に出されたのは……………

「……………ウソやろ」

「文句言つな、打ち合わせするぞ。まずは……………」

Side・other

洛陽の城壁の門、そこには十数名の兵士が立っていた。洛陽は帝の

お藤元、それなりに出入りも多い。それ故に通る際には簡単な確認があるのである。

この職を始めてそれなりの経験を積んだ兵士は目の前の男と少女に目をやった。

男の方は中年の容姿。腕には装飾品を付け、それなりに裕福に見える。

少女の方は黒髪でおかつぱ。服は地味目。細い目がより可愛さを出している。

形式的な質問を開始する。

「職業と目的は？」

「商人です、今回は香辛料を運びに参りました。」

嘘ではないだろう。先程連れていた馬の積み荷の中身は辛い粉が詰まっていた。

「取引先は？」

「狼堂の方へ。」

狼堂。果実や調味料等を漢だけで無く、南蛮や西から来る異民族からも取り寄せ洛陽の食事処や宮中に流通させている店である。

「証明するものはあるか？」

「ここに」

兵士は渡された書状を読み取る。内容は東へ香辛料を取りに行くついでに見習いの子供を研修のために連れていけ、といったものだった。

「この子が見習いの？」

「はい、ただの女子だと思っていましたが中々体力のある子で……」

「ほう、若いのに感心だ。」

これ以上聞く事も無いし大丈夫か。と兵士は判断し少女のほうに目をやった。

「まあ、通っていていいだろう。お嬢ちゃん、仕事頑張れよ」

少女は兵士に顔を向けて微笑みながら言った。

「おおきに、兵士サンも頑張ってな？」

そして商人一行は中へ入って行った。兵士はその後ろ姿を見送りながら思った。

（あんな可愛い子に頑張れって言われたら、不思議と力が沸くなあ……………）

一方商人は無表情ながら心中大爆笑しており、少女は顔が引き曇っていた。

後に張汎が宴会がある度にこの出来事、「美少女汎ちゃん事件」を肴に大いにいじくり回されることになる。

t o b e c o n t i n u e d

第十四話 〔Wake and girl〕(後書き)

- Key Word -

・西の巨大兵器、電撃の仙術使い、メタルギアソリッド3より。シヤゴホッドとヴォルギン大佐。こちらの世界ではメタルギア紛いのことが起きている。外史なら仕方ない（キリッ）

第十五話 〈Little Princess〉 (前書き)

週二ぐらいでいきたいけど中々上手く書けない今日この頃。

駄文ですがどうかご容赦を。

設定で疑問に思っても「ああ、なんだ外史か」と流しちゃって下さい。

第十五話 〈Little Princess〉

Side・張汎

こんにちは、おはようからおやすみまで別に見守らない張汎や。

さて、ボクは無事洛陽へと入ることができた。格好も普通のまんまや。

女装？ボクのログ（記録）にはなんもあらへんなあ。

宮中に入る前に蛇のオツチャンが表の仕事の服装に替えるらしいのでオツチャンの別荘セーフハウスに寄ることになった。

ボク もそこで宮中の仕事用の服を貰うそつや。女装じゃ無いことも何度も確認したわ。

そんで今、オツチャンが替えるついでにボクの服を持って来るのを待ってるんやけど……

「……………」ジーーーー

なんか家にいた赤髪の子にガン見されとる。いや、案内された部屋にもうおったんや。

「……………」ジーーーー

歳は、しーちゃんと同いくらいかな？背丈もそれぐらいや。

ここまでは普通の女の子やけど、持っている氣の量がとんでもない。表面から少し漏れ出してるほどや。まるで幾百もの獣が中につまっ

とる感じがする。

「……………」

んで、そないな子にガン見されると少し疲れる。どうしましょ？

「……………」

「あの、そんなに見てどないしたん？」

「……………」

何って……………」

「何ってヒドいなあ、普通の男の子や」

「……………」

すごい直感や。野性の勘か？

しかし何、か。ほかの人と違うみたいやし何て説明すればええんや
る？新人類？まあ無難に

「ボクの名前は張汎、字は文芹や。まあ軽く張汎って呼んでや」

「……………」

「そ、張汎や君は？」

「……………」

「ん？それ真名やない？」

「……これしか、無い。……張汎になら、良いと思った」

アララ真名しかないんか。まあおもしろい子やしボクもええかな？

「そっか……じゃあボクも真名で銀って呼んでええで？」

「……わかった、ギン」

お互いに真名交換したら蛇のオツチャンが入ってきた。

「ん？恋ここにいたのか、留守番は大丈夫だったか？」

「……ん、みんながいたから寂しくない」

「そっか、近い内家に帰るから連れて行く準備をしておけよ？」

「……ん、わかった」

「蛇のオツチャン、この子は？」

「拾った子だ。俺が治めているところだな」

……は？治めている？

「言い忘れてた、表での俺の名前は丁原^{ていげん}。荊州の刺使だ。」

蛇のおっちゃん、もとい丁原の付き人としてボクは宮中へ入ることになった。

宮中へ行く途中一通りの作法を教えて貰った後、丁原に特命隊について説明を受けた。

曰く特命隊は非正規の部隊らしい、簡単に言えば帝直属の義勇軍みたいなものだそうだ。

任務は帝から書類の中にカモフラージュされて隊の人間に送られてくる。そしてその任務を秘密裏にこなすというシステムだ。

もうまんま某ドラマになつとる……………

冗談で「仁って人おるんちゃう？」って聞いたら「何故知ってる？」って顔をされた。おるんかい。

そして城へ到着。守衛に挨拶しながら入って丁原の執務室へ向かう。仕事の確認をするらしい。

お互い無言で歩いて行く。まあそついう上下関係を演じるためとはいえキツイなあ。

「丁原!!」

突然後ろから声がかかった。

振り向くと銀の長髪の女性がずかずかと歩いて来る。丁原は一瞬間倒臭そうな顔をしてまた無表情に戻った。

「これは何進將軍。どうかなされましたか？」

將軍、何進は丁原の胸元まで近づき見上げるようにして丁原を睨んだ。

「貴様、今まで何処に行っていた！？ここ半月は見なかったぞ！！」

「一時荊州へ行きました。必要な書物を取りに行きました」

「何？お前の屋敷にあの赤毛の娘はいたぞ？」

「一々連れて行っても疲れるだけでしょう？今回は留守番させました。腕は立つ子なので盗みが入っても大丈夫だと思いましたが」

そして一息ついて、

「わざわざ私の屋敷までご足労いただきありがとうございます。手間をかけさせてすみません」

丁原が頭を下げたので自分も下げる。

「わ、わざわざお前のためじゃ無い。將軍として当たり前のことをしたまでだ！！勘違いするなよ！？」

「そんなつもり無いんだからな！？」と言いながら慌てて何処かへ行ってしまった。

今のつて……完全なツンデレやる。

「まったく、顔を合わせる度にああやって突っ掛かれる。原因はわからんが目の敵にされている」

「さっきの御方は？」

言葉遣いに注意しながら聞く。

「何皇后の姉君で大將軍、何進様だ。まあ悪い人では無いが………
いかんせん気難しい方だな？さっきみたいなきが多い。お前も注意
してくれ」

いや丁原サン？それは貴方の時だけですわ……………

執務室に到着し表の仕事の説明を受ける。ほとんどが部屋の掃除と書類整理、そして丁原の補佐役らしい。

裏の仕事は来た時に話すそうや。まあしよつちゆう帝サマから来ることも無いと思っけどなあ？

今日は特にすることも無いので城内の構造を実際に見て回って暗記をしろとのこと。入ってはならないところを赤く示した地図を渡されて執務室から出た。

さて、ここは一つ探検しましょか。ここに来て初めての自由行動や。

食堂やな。ここが近いから一番に来たわ。

「おい！ネギまだ切り終わらねえのか！？」

「大将オ！獅の字が頭から鍋に突っ込みましたああ！！」

「あいつは今日で何回目だ！！他へ回せ！！」

「チャーシュー特盛十人前入りましたあ！！」

「てめえら！！気合い入れてやるぞオ！！」

- 了解イイイイ！！！！ -

す、すごい熱気や。まだお腹空いとらんし他行こ。

調練場か。どないなことしとるんやろ？ちよつとのぞいてみよか。

お、集団の模擬戦闘か。

「あゝ今日のはかの有名な『槍將軍』の部隊にいた方達とやってもらいます。心してかかってください」

え、母ちゃんの部隊？どんな人達やろ？

「オオールハイールカンオウチヨオオーウ！！」

「今は帝が微笑む時代なのだア〜〜！」

「愉快的彫像オブジェにしてやんよオ！」

「来いよ新米、武器なんか捨ててかかって来い！」

…………… 全員格好が独特過ぎる。

「とまあ油断していると大怪我しますので注意してください。……………」

… それでは始め」

- よお〜く燃えるぞオ〜！ -

- シイイイんまアアアアイクウウン〜！ -

- 何が始まるんです？ 第三次模擬戦闘だ -

母ちゃんが隊長やつてた理由つて。母ちゃんがあの中で一番の常識人やったからやるなあ……………」

隠匿の術を使って城壁に来てみた。絶景やな。
ん？あそこにいるのは見張りの人か？

「細作らしき人物が逃走しています」

「待て…………… 待て…………… 待て…………… 待て…………… 片付ける」

- バシユン…………… ドス -

「…………… 美しい」

ゆ、弓であるの距離を撃ち抜きおつた。何者や。

……………ふう、そろそろ全部やな。

一通り見たけどさすが国の中心、総合的な武力が高い。暗雲が来ているって聞いたけどやっぱり上の人間か。

宦官も何人か見たけど中々ヒドかった。氣の濁りが半端なかったわ。

さて、ここで最後。書物庫や。

書物庫いうても図書室みたいになつとる。ちよろつとみてみよか？

おお！？ボクが前書いた「第六天魔王伝説」やん！こんなトコにもあるなんて嬉しいわぁ〜

ん？「災害と氣の関係」？これちょっと呼んでみよ。

……………ふう、真面目な意味での賢者タイムやで？

中々面白い論文やった。新しい氣のバリエーションが増えそうや。

しっかし大分古いヤツやなこれ。筆者の名前も「太……………」でかすれとるし。太郎、なわけ無いな。

さて、そろそろ執務室へ帰りたいたいトコなんやけど……………

「すみませんお嬢さん方、何かご用ですか？」

さっきから二人の女の子がこつちをジーツと見とる。今日で二回目

や。

どちらも美しい藍色の髪に赤い目。お偉いさんの子やるか？片方は長い髪でもう片方はおさげになっとる。

「ねーねーなにしてるの！？」

長い髪の子が質問してきた。元気な子やな。

「あ、あつうう……………」

おさげの子はかなり内気や。目を合わせたらすぐに片方の子の後ろに隠れてしまった。

「何って、本を読んでるんですよ」

「ほん？ほんってえがいつぱいある？」

「それは絵本ですね。こんな本です」

「あはは！くろくてわかんない！」

そら文字ビッシリやしな？

「かみなり……………じじい？」

へえ、おさげの子ちよっと読めるみたいやな。小さいのに感心や。

「その通りです、すじいですな〜」

「かずちゃんすげーっ!!」

「う、うん」

「にーちゃん!わたしもほんよみたい!」

この子達向けの本か……児童文庫なんてあんまり無いなあ。「こ」政まつりの本ばっかやし。

……あ、あつた。これ子供向けに書いたしわかるはずや。

「これはどうでしょう?」

「んー?まおー?」

「……だいろくてんまおうでんせつ?」

うん、大丈夫みたいや。

「読めるみたいですね。二人で部屋で読んでみてください」
「わかったー!いこうかずちゃん!」

「て、てんちやゝゝん!!」

行ってしもうた。面白い子たちやっとな

さて、今度こそ丁原サンのトコへいこが。

-カツ、カツ、カツ、-

宮中の長い廊下、緩やかに歩く者がいた。

すれ違う人々が頭を下げることに対し、優しく微笑みながら会釈をしていく。

彼は独特な雰囲気を感じていた。温か過ぎず、かつ冷た過ぎず、そういう雰囲気。

「あー！ちよーじょー！！」

ぴたり、と歩む足を止め振り返る。

藍色の髪を持った幼い少女達が走ってきた。

彼、張譲は片膝を着き微笑みを崩さず少女達と同じ目線になる。

「協様、弁様。如何なさいましたか？」

髪の長い方の活発な少女、劉弁はニコニコと笑っていた。

「へへーん、きょうはちよーじょーにほんをもってきた!」

「本、ですか?」

張讓はおさげの少女、劉協を見る。

劉協は頬を赤く染めながら顔を下に向けた。

「あの、いつしよに……よんだ」

「だからちよーじょーもよんで!おもしろいよ!」

劉弁から一冊の本を受け取りながら、張讓は苦笑した。

「本もよろしいですが……先生が探していましたよ?」

「わわわっ!?!か、かずちゃん!せんせーおこったらこわいからはやくいこう!」

走り去っていく劉弁、だが劉協は張讓をじっと見続けていた。

「協様?」

「……………こんど、いつしよに……ほんをよ、よんでくれる?」

それを聞いた張讓はニコリと白い歯を見せて笑った。

「勿論です。弁様も一緒にね?」

「……………うん！」

そして劉協は劉弁の後を追った。

他に誰もいない廊下。張讓は静かに立ち上がり手元の本を眺めた。

「……………私にはもう戻れないんです。先生」

その時彼が浮かべた笑みは。

とても優しく。

そして悲しく歪んでいた。

懐に本を入れ、張讓は再び歩き出す。

「どつしましようかねえ……………」

その眩きは自身へか、それとも懐の魔王へか。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
. . .

第十五話 〈Little Princess〉(後書き)

- Key Word - とおまけ

・ 槍將軍の愉快な仲間達

〈 ルルーシユの親父、ジャギ様、学園都市第一位、メイトリクス。新兵の中にベネットそっくりのやつがいたのは完全な蛇足。てめえなんか恐かねえ！

・ 見張りの人達の台詞

〈 C O D のマクシミラン大尉の名言を混ぜたやつ。スタンバァーイ、とビューティホー……。

・ おまけのけ

・ 劉弁の容姿は東方の天子、劉協はそれが八の字眉になっておさげにした感じ。

・ 格好いい張讓が書きたいと思った。後悔はしていない。

あと容姿は B L E A C H の藍染が眼鏡を掛けていた時の姿。

まあ藍染ほど腹黒くするつもりは……ない？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4802u/>

神鎗と恋姫達(オリ主注意)

2011年8月27日12時50分発行